

研究紀要

第13号

1997

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

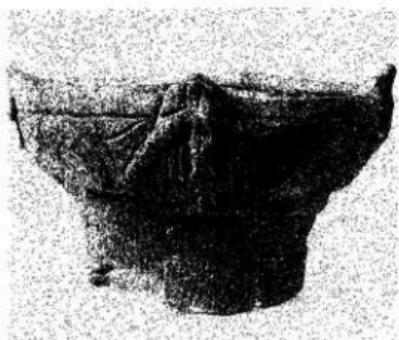
研 究 紀 要

第 13 号

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真 1



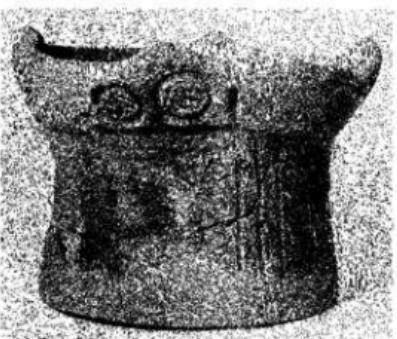
1 包含層



2 包含層



3 10号住居跡



4 9号住居跡



5 15号住居跡



6 包含層

写真 2



7 10号住居跡



8 10号住居跡



9 10号住居跡



10 包含層



11 3号住居跡



12 10B号住居跡

目 次

序

[論文]

- 川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群 田中 英司 (1)
- 水窪遺跡の研究 谷井 彪 (13)
—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性— 細田 勝
- 埼玉県内における柄鏡形住居跡の地域的様相 (1) 鈴木 秀雄 (67)
- 手焙形土器の研究 (2) 高橋 一夫 (85)
—伊勢湾・近江・北陸編—
- 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪 中村 倉司 (141)
- 関東地方出土の古代權衡資料 福田 聖 (169)

水窪遺跡の研究

—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性—

谷井 彪・細田 勝

要約 水窪遺跡は埼玉県西南部に位置する入間市域に所在する。この地域は、加治丘陵沿いに西へ向うと、武藏野台地を形成した多摩川の扇状地にいたり、多摩丘陵との交通の可能な地域である。特に入間市域では多摩川の両側の台地上には連続するように縄文中期の遺跡が並ぶ。発掘調査例も多く、県内でも縄文中期後半の諸相が最も明らかになっている地域の一つといえよう。

水窪遺跡はすでに3回の調査が実施され、うち入間市教育委員会調査の2回はすでに報告がされている。残る昭和42年に調査は種々の事情から未報告に終わっている。そこで本稿では出土遺物を中心紹介し、併せて加曾利E式の編年をあらためて検討し直すとともに筆者らが「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」で検討した中期終末の編年での問題点の修正を加えることを目的とする。検討にあたっては、この地域で重要な要素を占める曾利式系土器群との編年対比と加曾利E式との関係を検討する。

また、最後に縄文土器研究にあたっては客観的事実解明の困難性を示すとともに、現在という視点からみることができず、研究者の構図を超えた結果は導き出しえないとする基本的立場を付け加えた。

I はじめに

昭和40年代になると、日本列島は東京オリンピック、大阪万博博覧会などを契機にして経済の高成長期に向かえ、大規模開発と共に多くの中小改良工事も盛んに進められるようになった。首都圏に位置する埼玉県でも早い段階からこの影響を受け、開発に対応した埋蔵文化財の発掘調査が本格的に始った。埼玉県では昭和40年に尾山台遺跡、昭和41年に霞ヶ関遺跡の調査が行われた。記録保存としての発掘調査が本格的に動き始めた時期に当たる。当時の発掘調査は大学で考古学を学ぶ学生を大量動員してこれに当たるケースが多かった。昭和40年代は埼玉県でも、各種の開発に伴う発掘調査が一斉にはじまる時期に当たる。当初大規模な開発事業に伴う発掘調査が進められるようになると、宅地造成、鉄道建設、道路網の整備などが原因による大小様々な開発事業も発掘調査の対象となるようになった。

埼玉県教育委員会は、これらの急増した発掘調査に対して体制整備を進める必要から埼玉県遺跡調査会を発足させることになった。昭和42年4月1日から正式に業務を開始した。民間的組織であったが、県の補助金を受け、多くの発掘調査を進め、埼玉県における埋蔵文化財保護の先頭を走ってきた団体であった。

今回紹介する水窪遺跡は、入間市域で実施された国道16号線のバイパス工事に伴う発掘調査で、遺跡調査会が発足してまもない昭和42年度7月から開始された調査であった。幸い、筆者の一人谷井はこの調査に参加する機会を得ることができた。今から30年前のことであり、夢中で記憶も定か

でなくなっているが、今から振り返ると、保護行政の先端に立ち合うことになったことになる。遺跡調査会は昭和55年度の当事業団の発足でその役割を終えたが、その間埋蔵文化財調査体制の要としての役割を果たしてきた。

昭和42年に行われた水窪遺跡の調査の成果は、全国にさきがけて昭和43年に行われた遺跡報告会のさきがけである。第1回遺跡発掘調査報告会の報告で、その発表要旨に概要を報告した（谷井 1968）。また、県内の企発掘調査をまとめた埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧（埼玉県教委 1973）に報告されている。要約すれば以下のようなになる。

所在地 入間市扇町巣水窪

調査主体者 埼玉県遺跡調査会

調査年月日 昭和42年7月9日～42年7月15日

調査担当者 内野晃延

文化庁通知 地文記第1562号 昭和42年9月5日

調査面積 1,650m²

遺跡の概要 (遺構) 繩文中期住居跡16軒 墓穴状遺構1 土塙4

(遺物) 土器(勝坂期後半～加曾利E III式) 打製石斧 石皿 石錫 耳飾



第1図 水窪遺跡の位置



第2図 関東平野の地形面区分図（入間市史通史編より）

るかに超えた対象面積であり、報告書も立派にまとめあげられている。

埼玉県遺跡調査会の発掘資料のうち、未整理の資料については埼玉県埋蔵文化財センターで引き継ぎ保管している。水窪遺跡の遺物も保管されており、学生として参加した谷井が橋本勉、細田勝の両氏らに遺跡の概要を報告したい旨お願いしたところ、快くお引き受けいただけた。特に遺構・遺物の照合から、実測・トレース等整理作業全般にわたり、橋本の労に負うところが多かった。

たまたま当事業団の縄文部会の有志により事業団発足20周年をめざして東日本縄文土器の編年での再検討を進め、我々としての考え方を大方に問い合わせたいという事業も始めたところであり、当然中期後半の関東加曾利E式土器の再検討も課題の一つとしてあげられる。加曾利E式は前段階の勝坂式はもとより周辺土器群とも密接した関係をもって変遷、展開しており、簡単に編年及びその内容を明らかにすることはできないが、西関東と連なる埼玉西部地域に位置する入間市の水窪遺跡といった具体的な資料をとおして西関東加曾利E式の実態に触れるよい機会と考えた。

II 水窪遺跡の立地と概要

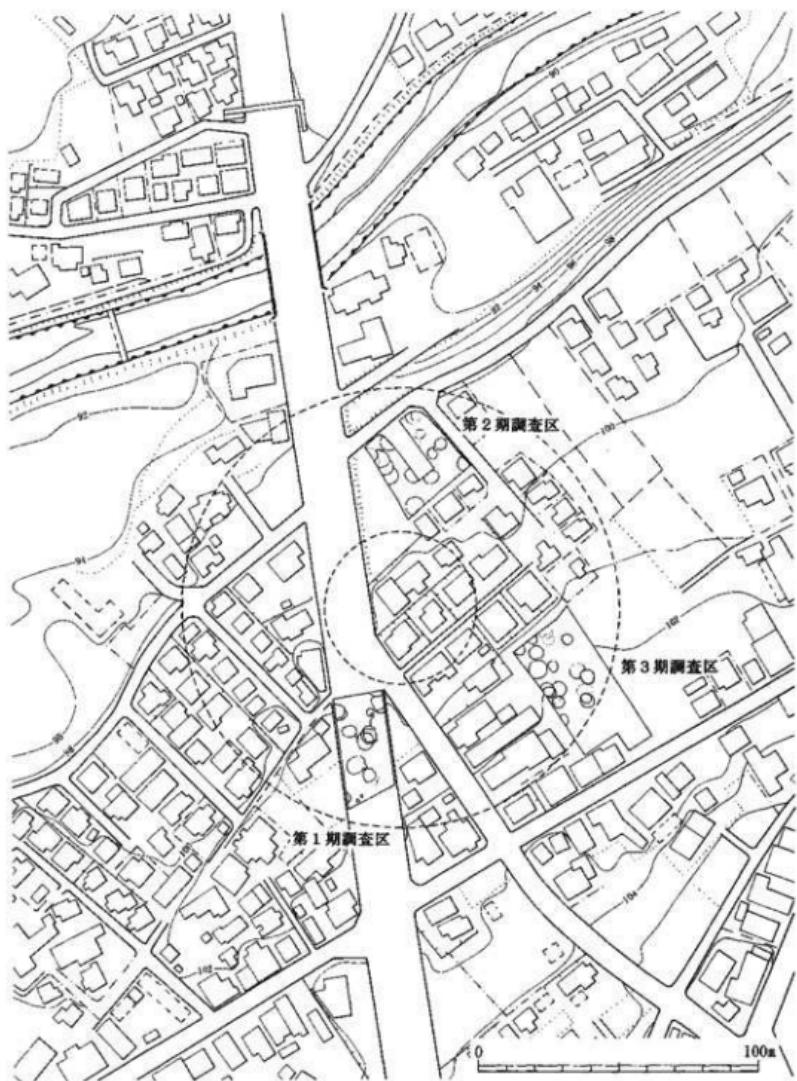
1 立地

入間市域は埼玉県の南西部に位置し、西側は東京都瑞穂町に接する。埼玉県を地形的に区分する場合西が山地、中央が台地、丘陵、東が沖積地を中心とした低地と区分されることが多いが、入間市域はちょうど西の関東山地から中央の丘陵、台地にかけた地域で、東西に伸びる関東山地から派生した加治丘陵が伸び、北側に入間川、南側は青梅市東方付近から流れる霞川を隔て下末吉の段丘面（金子台）、不老川を中心とした立川面の段丘がほぼ直線的に並んでいる（第2図）。

水窪遺跡は、丘陵地帯から台地地帯へ変換する東西からみた地形の変換点近くにある。立地的に

この調査の現地指揮は遺跡調査会の職員であった丸山勝男氏があたり、参加した学生は主に埼玉大学の学生であった。調査終了後、遺跡調査会及び丸山氏の御好意で調査参加者であった学生に整理作業を任せられた。今から考えれば、学生の実務的な勉強のために許していただいたが、上に示した調査概要のように当時未熟な学生にとっては大規模な調査の報告をまとめあげることはとうてい無理であり、遺物の復元すら満足にできなかつたのが現状であった。

その後種々の理由で正式な報告書が未刊に終わった。発掘から現在まで30年の歳月が過ぎたことになる。その間、水窪遺跡は入間市教育委員会により2回の発掘調査が実施された。いずれも当時の調査面積をは



第3図 水路遺跡全体図

は北に瀬川を挟んで加治丘陵先端を望む金子台北辺の遺跡である。調査地点は人間市扇町屋5丁目にあたる。瀬川が生活の中心となった遺跡といえよう。

霞川をさかのぼると、青梅市域に至るが、この地は武藏野台地の扇頂部にあたり、多摩川が関東山地から平野部に移行する地点でもある。霞川の上流は直接多摩川流域とつながっていると考えることができる。入間市域は埼玉県でも多摩川流域諸地域と最もつながりのある地域であり、川を通して直接的に交流の可能な地域ともいえる。

武藏バイパスに伴う発掘調査地点は霞川から南に140m離れたやや奥まった地点である。東西に伸びる金子台の段丘面の北辺に一段低い標高100mから102mほどの地域で、南側はやや傾斜が強くなって一段高い平坦面に至る。遺跡の南側、霞川に接する部分は、等高線が川岸に飛出したように伸びており、微地形であるが、台地縁辺部が膨らんだ部分に当たる可能性があり、川幅が狭くなっていたと思われる。

霞川流域の縄文中期の遺跡としては、右岸上流部から霞川遺跡(齊藤 1988)、丸山遺跡、高野屋敷遺跡(中島 1975)、久保遺跡(野村 1994、齊藤 1996)があり、下流へは扇町屋の市街を隔てて金堀沢遺跡群(齊藤ほか 1993)、大将陣遺跡等があり、遺跡群が連なって展開していることがわかる。左岸は加治丘陵地帯であるが、ちょうど対岸は坂東山遺跡の大遺跡が、さらに先端では高倉寺前遺跡、若宮遺跡が占めている。それぞれの遺跡の全体像はまだはっきりしなが、各遺跡とも徐々に調査が進められており、各種の分布調査、発掘調査の成果をながめると、中期遺跡群が霞川流域に連続して並んでいることがわかる。

2 水窪遺跡の概要

今まで実施された調査は今回紹介する昭和42年度の国道16号線バイパス工事に伴うもの(第1期調査)、平成元年に実施された第1期調査の北でバイパスの東、台地縁辺部の宅地造成に伴う調査(第2期調査—入間市第1次調査)、平成2年に実施された第1期調査東側の店舗兼共同住宅建設に伴う調査(第3期調査—入間市第2次調査)がある。

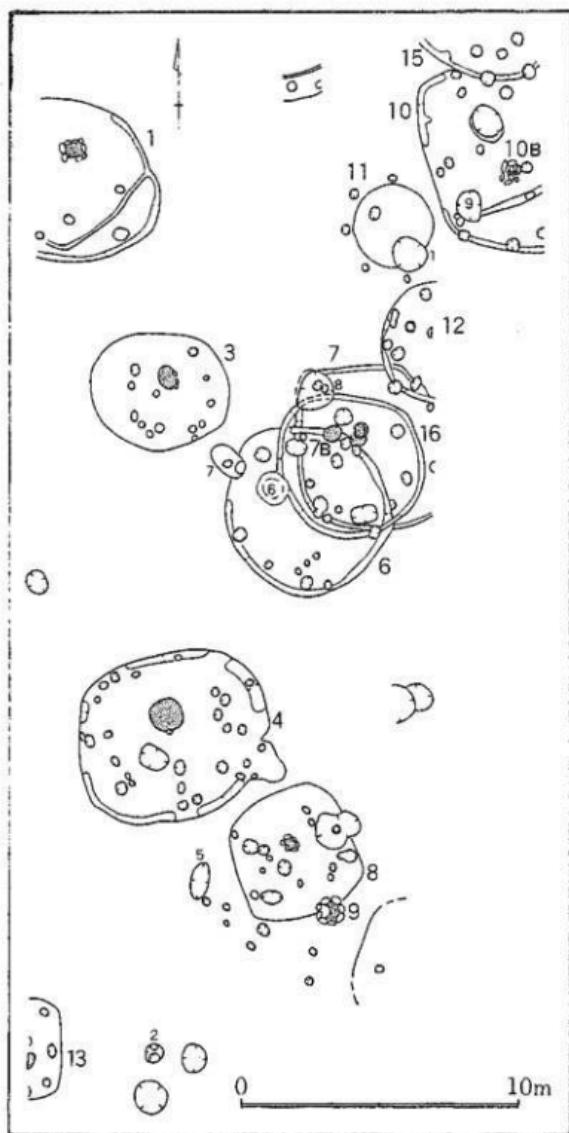
第1期調査は幅18m、長さ50mの調査区で、ほぼ平坦面で、遺構も満遍なく分布していたといえよう。当時の記憶をたどると、北側は住宅で平坦面、南は細い道を挟んで一段下がった斜面だったようである。

第2期調査区は台地縁辺部であり、全域から遺構が発見されている。遺構の並びをみると、北半から東側が密度が高そうにみえることや南端の隅を中心にして土壙群がみられることから住居跡密度の薄い地域の可能性がある。北端は道路などで崩されているが、遺構の範囲はまだ北に伸びると考えられる。

第3期調査区は標高102mの緩い傾斜地からやや傾斜の強くなる部分にあたり、南東側では遺構がほとんど発見されていないことから、水窪遺跡の南東限界の地域と考えられる。

遺跡全体から較べれば調査範囲はまだまだほんの一部にすぎないが、今までの3期の調査結果から集落の範囲を推定すると、第3図のような外径150mの環状、あるいは馬蹄形集落となろう。

第1期調査区は南北に長い調査区であったが、北に向うにつれて次第に黒色土が厚くなる。北端では40cmから50cmであったが、南側は1m近くあった。先に述べたように調査区南側は一段下がっており、地形上から判断すると集落帶の南限に近いかもしれない。遺構の並びは調査区中央から北



端にかけて集中しているようにもみえ、南端近くでは住居跡の複合は少ない。調査区の長さが50mであることから、集落帶のほぼ中央を調査したようにみえる。南端の集落の続きを予想されるが、第3図に示した集落復元図などを加味するとそれほど伸びないかも知れない。

なお、発掘調査の過程で遺構番号を付したが、最終的に整理した結果、2、5、14号の住居跡番号が欠番となつた。

第4図 水道遺跡Ⅰ期全測図

III 水窓遺跡の遺構と遺物

1号住居跡

調査区の南東隅で検出された。東南から南壁部分にかけて2条の周溝が検出されており、重複あるいは拡張された住居と考えられる。北西壁部分が調査区域外になっていたため、全容は定かではないが、現存部分から推定すると内周の住居が径5m程度の隅丸方形、外周の住居が径5.2~6m程度の隅丸長方形と推定される。掘り込みは浅く、確認面から20cm程度である。周溝は内周部で床面から6~10cm、外周部では4cm程度である。床面は平坦で、内周の住居跡では東壁寄りに石匂いが検出された。石匂い炉は1m×0.68mの長方形で一部を除き、實際に河原石が埋設されていた。床面からの深さは約20cmで、下部に焼土の堆積が認められた。炉に接して土器が埋設されており、位置関係から見て、南西壁側が入口部と推定される。

1号住居跡出土遺物（第5図～第6図、第23図4、第24図6）

全体に覆土が浅かったために土器は出土量が少なく、全容が窺える資料はない。第5図1~4はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部文様を持つ加曾利E式系の土器である。口縁部文様帯幅が比較的狭く、渦巻文と梓状区画文とで文様構成される土器であろう。頸部に無文帯をもつものもある。5~8は胴部破片で、5~7は渦巻文が施文される事例である。いずれも3本沈線で文様が描かれて、沈線間の繩文が磨滅している。8は撚糸地文で、隆帯による懸垂文をもつ土器である。先の沈線の事例と同一の施文効果をもつものといえよう。10はつなぎ弧文を沈線化したモチーフをもち、連弧文の出現に対応する文様である。11~14、第6図1は連弧文土器である。第5図2以下には曾利式系の土器を一括した。口縁部が無文で、胴部に懸垂文をもつ土器である。懸垂文には、隆帯や沈線があり、懸垂文間に斜行する沈線が施文された土器が含まれる。

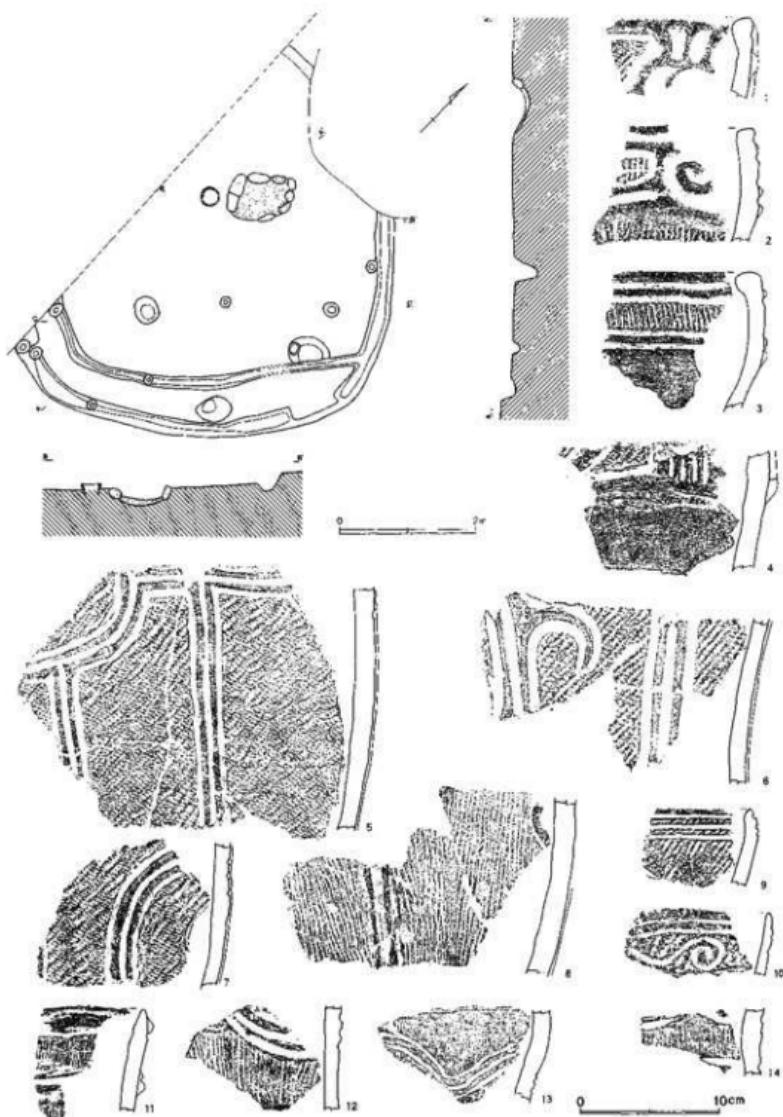
石器は小型の打製石斧（第23図4）と磨石（第24図6）が出土した。

3号住居跡

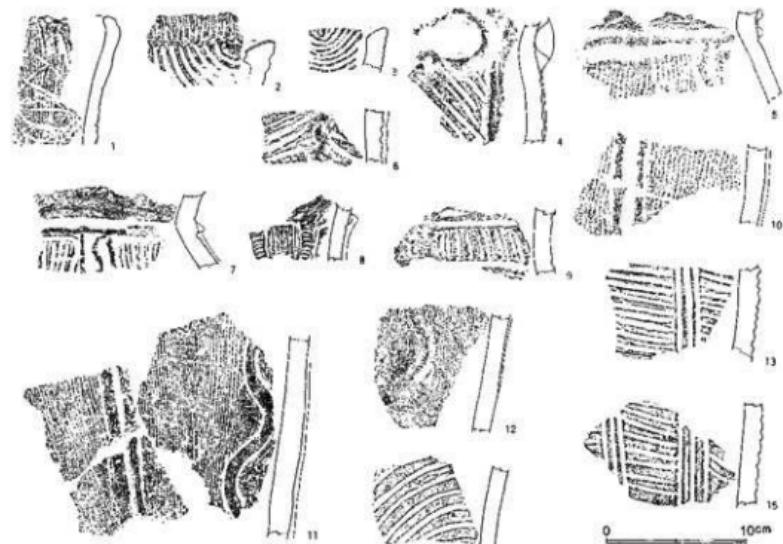
1号住居跡の北西に位置し、最も重複の激しい6、7、12、16号住居跡に隣接して検出された。住居跡は西壁部分が不確実で、平面形態は柱穴から推定した。住居跡は、径が3.8mの隅丸方形と考えられる。確認面からの深さが6~8cmと極めて浅い住居である。4本主柱穴の住居で、柱穴の深さは床面から0.4~0.6mである。北壁寄りで検出された炉は、径が0.6×0.4mの石匂い炉で、炉石の大半が抜かれていた。遺物は炉の南側に集中し、礫や土器などが投棄されたような状態で出土した。

3号住居跡出土遺物（第7図）

器形復元可能な土器が4個体出土した。1、3の加曾利E式系の深鉢形土器は、頸部無文帯をもたず、口縁部文様帯幅が狭い。ともに口縁部に渦巻文と梓状区画文を持つが、3の文様構成はつなぎ弧文風である。いずれも胴部は蛇行と直線の隆帯による懸垂文である。1は4単位波状口縁、3は平縁で、地文は1が撚糸、2が単節繩文である。4は井戸尻糸終末の土器で、2単位突起に渦巻文が転写する。混在であろう。5は口縁部が無文で、櫛齒状工具による条線地上に懸垂文をもつ。6、7はつなぎ弧文の土器で2本隆帯と3条の沈線による文様構成は3と同様である。8は2本沈線による弧あるいは渦巻風の文様間に単沈線の蛇行懸垂文をもつ土器で、連弧文とは異なり、曾利



第5図 水庭遺跡1号住居跡及び出土遺物（1）



第6図 水窪遺跡1号住居跡出土遺物（2）

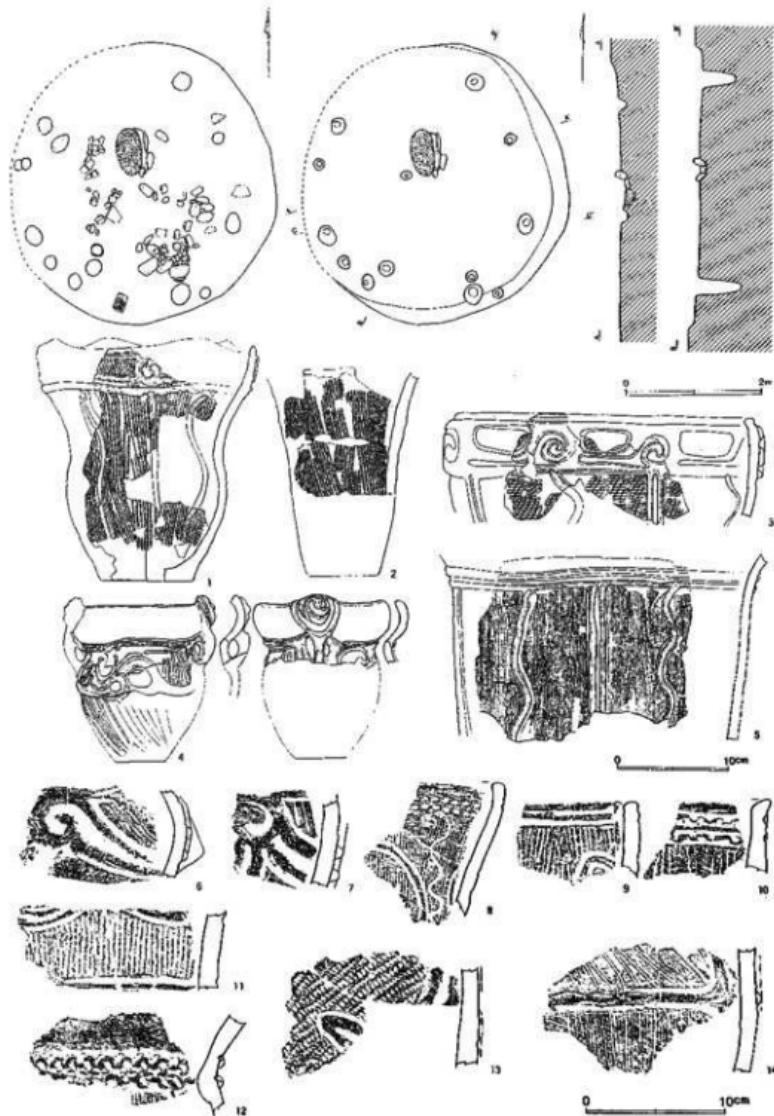
式風である。9～12は連弧文土器で、交互斜突帯が沈線表現の體もある。13はあるいは渦巻文、14は曾利式系の土器であろう。

4号住居跡

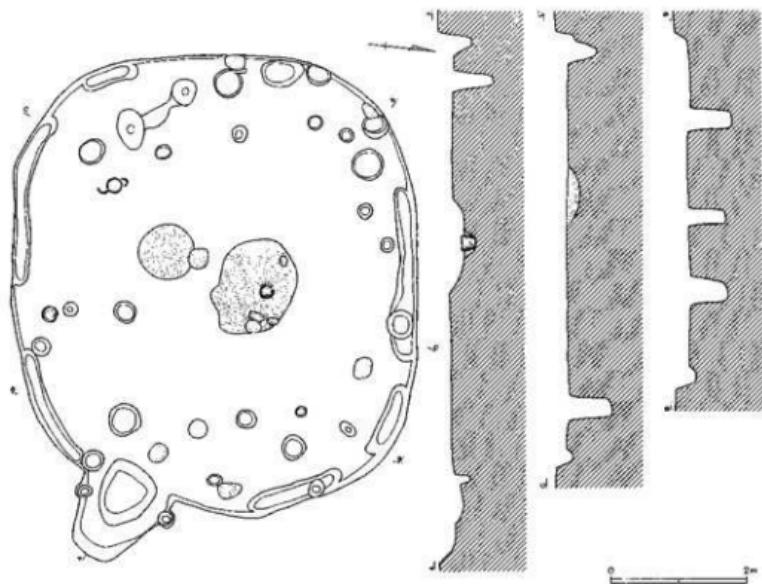
調査区の北より検出された住居跡で、8・9号住居跡に近接している。単独で検出された住居跡としては、水窪遺跡I期調査のなかで最も良好な検出状況であった。住居跡の南東壁部で土壤と重複するが、平面形態は隅丸長方形で、径が 5.8×6.6 mである。確認面からの深さは0.2m程度と比較的浅い住居跡である。壁に沿って部分的に周溝があげられる。床面中央部に2基の地床炉が検出された。径が0.8mの円形のものと、1.1×1.4mの長方形に近いものとがあり、前者は中央部の南壁寄りに位置している。後者には土器（第9図3）が埋設されていた。柱穴は壁寄りにめぐるものと壁から1.2～1.6mほど内側に位置するものとに区分され、いずれも4～5本柱穴であろう。前者が円形の炉に、後者が長方形の炉に対応すると考えられることから、拡張と見てよいだろう。いずれも入口部は西壁側に位置すると思われる。柱穴は床面からの深さが0.25～0.6mである。遺物は炉体土器以外は床や覆土内から少量の破片が出土した程度である。

4号住居跡出土遺物（第9図、第23図10、11、15、第24図5、8～9）

土器は全容が判別できる7個体が出土している。2が床面の土器で、3が炉体土器、他は覆土中から出土した。加曾利E式系の1、3は、口縁部文様の表現が異なっている。1、8は渦巻文が単独で描かれ、付随する沈線とによって枠状区画文を構成したもの、は渦巻文が斜行する隆帯によって横S字状に連結されたもので、口縁部文様帶下端区画線による枠状構成はあるものの、9のつな



第7図 水庫遺跡3号住居跡及び出土遺物



第8図 水庭遺跡4号住居跡

ぎ弧文に近い文様構成といえよう。沈線地面上に文様構成されており、器形も口縁部が強く開くなど、曾利式風である。2、6、10はともに直線的に開く深鉢形土器で、曾利式系と理解される。2、10は口唇内面に稜をもつ。隆帯に接して2～3状の懸垂文が垂下する。10は懸垂文間が磨消されている。11～13、14・17は連弧文土器で14・17のように2本沈線で描かれたものもある。15、16、18、19は曾利式系土器で、15、16は重弧文が施文される。15は並行沈線の重複施文、16は単沈線の施文で隆帶の蛇行懸垂文間の施文である。18、19は渦巻文の土器で、並行沈線で表現され、文様間には单沈線が充填される。

5は詳細が不明であるが、胸部区画線間の橢円形文と光墳の刺突文には曾利式系の影響を思わせる。胸部の並行沈線による懸垂文は、端部が閉塞される部位があり、沈線間の網文が磨消されることから、新しい様相が看取される。

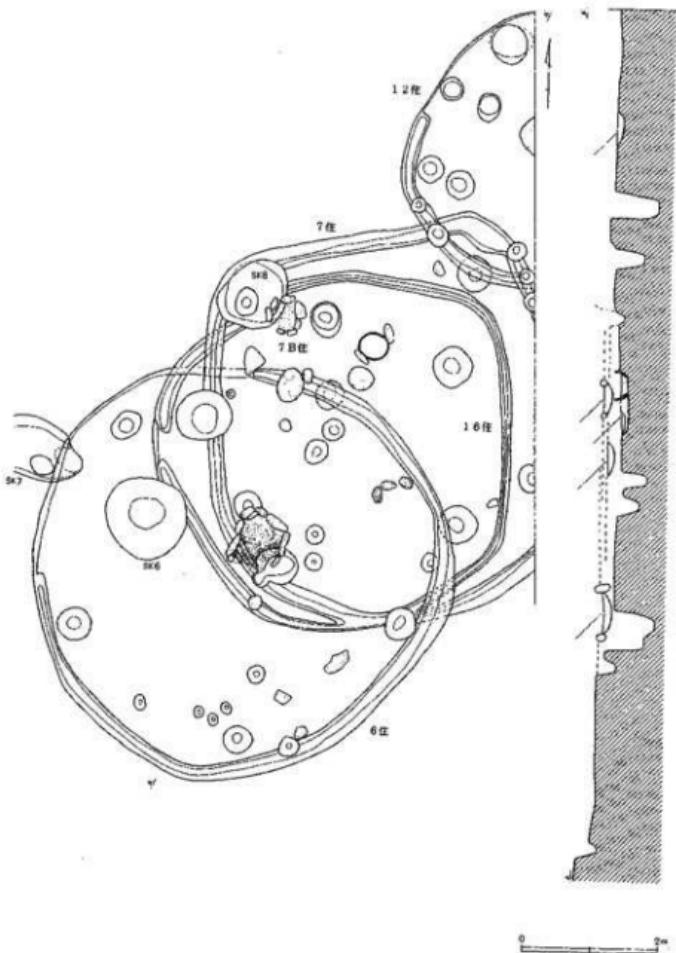
石器は6点出土した。第23図10、11は刃部が弧状で、片側縁にのみ抉入がみられる。

6号住居跡（第10図）

調査区中央部に位置し、4号住居跡に隣接する。7号、7B号、16号住居跡と重複している。16号住居跡は出土遺物が僅少で、正確な時期判定ができないが、炉が6号住居跡の周溝に切られていることや、6号住居跡の石廻いが16号住居跡の柱穴上に構築されていることから、6号住居跡が新しいことが明らかである。また7号住居跡は加曾利E I式に属することから、6号住居跡は7号住



第9図 水原跡 4号住居跡出土遺物



第10圖 水塉遺跡 6、7、7B、12、16号住居跡

括跡を破壊して構築されたことがわかる。住居は平面形態が五角形で、径が5.8～6m程度である。南西壁が入口部と推定され、炉の形態・位置とずれて、北西壁側が突出する。柱穴は壁に沿った5本柱穴である。破砕面からの深さは約0.2m、周溝の深さは床面から0.1m程度である。炉は石囲い炉で、やや奥壁寄りに位置する。径が0.8mの方形で、縁石の一部が失われている。

6号住居跡出土遺物（第11図）

曾利式系の影響を受けて変容した個体が目立つ。縄文地文に代わって、口縁や胴部文様間に沈線が充満された個体（1、2、7、8）が存在するとともに、器形も口縁がやや内湾気味に開く傾向がうかがえる。1は緩やかな4単位の波状口縁で、口縁部文様は、4号住居跡出土土器（第9図1）に類似する。文様帶区画の隆帯に接した懸垂文端部が閉塞されている。2は隆帯による懸垂文である。3の口縁端は不明だが、連弧状にめぐる隆帯に接した懸垂文間の地文が磨消されており、4号住居跡出土土器（第9図10）に近似した構成である。5は縦の沈線のみの深鉢で、口唇下に沈線がめぐる。6、9、10は無文である。13はつなぎ弧文の土器で、渦巻部分が隆帯によって文様帶区画と連結されている。14～16は連弧文、18は口頭部に斜行沈線文が施文される曾利式系土器であろう。

7号住居跡（第10図）

出土土器が加曾利E1式であること、断面に見る16号住居跡の炉が7号住居跡の覆土中に構築されていること、さらに16号住居跡の炉が6号住居跡に切られていることなどからみて、7号住居跡が重複した住居群で最も古い時期であることは間違いないから。炉跡のみの住居跡を7B号住居跡としたが、掘り込みや柱穴も検出されず、遺物も出土しなかったため、他の住居跡との前後関係は不明である。住居跡は東壁側が調査区域外となっていたため全容が不明だが、調査部分から推定すると隅丸方形と考えられる。径は南北軸で5.8mである。柱穴は4本で、各々コーナー部分のやや内側に位置している。南西隅の柱穴直上には6号住居跡の炉が構築されており、前後関係が明らかである。柱穴の深さは、確認できる部分で床面から0.6mである。炉はほぼ主軸線上で北壁寄りで検出された。掘り込みが浅く、壁際に土器が埋設されていた。土器の周囲に礫が検出されたことから、あるいは石窯い炉であったかも知れない。

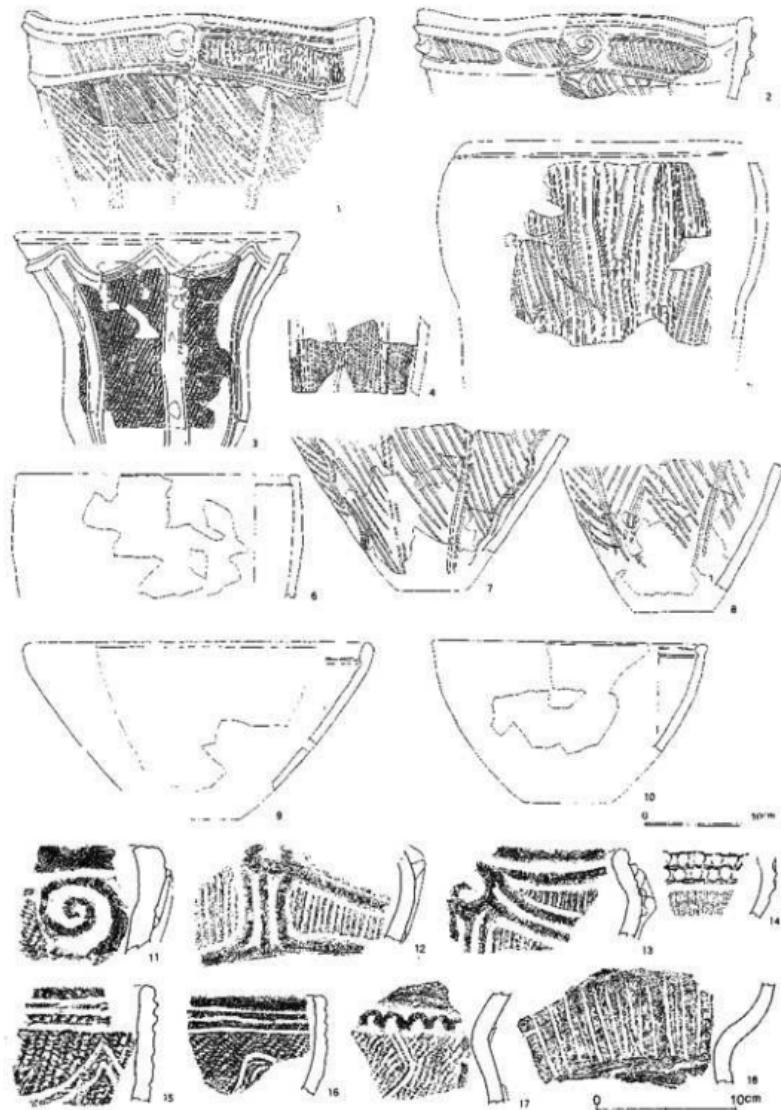
7号住居跡出土遺物（第12図、第23図2、5、8、16、第24図7）

加曾利E1式の前半に比定される水窪遺跡では最も古い土器群である。4単位波状口縁と平縁がある。1～4、6、8～10はキャリバー形の深鉢である。1～3、8、9は口縁部が隆帯文で、1と8はほぼ同じ文様構成であろう。2はクランク状文である。4・6・10は沈線による同心円文の土器である。4は4単位波状口縁で、波頂下に描かれる文様の中央部が突出する。10も同様である。5は有孔鍔付土器で、磨消縞文を持つ土器で、混在である。12は縄文地文の円筒形の土器、13は隆帯が密接した土器で、いずれも井戸尻糸終末の土器とみられる。

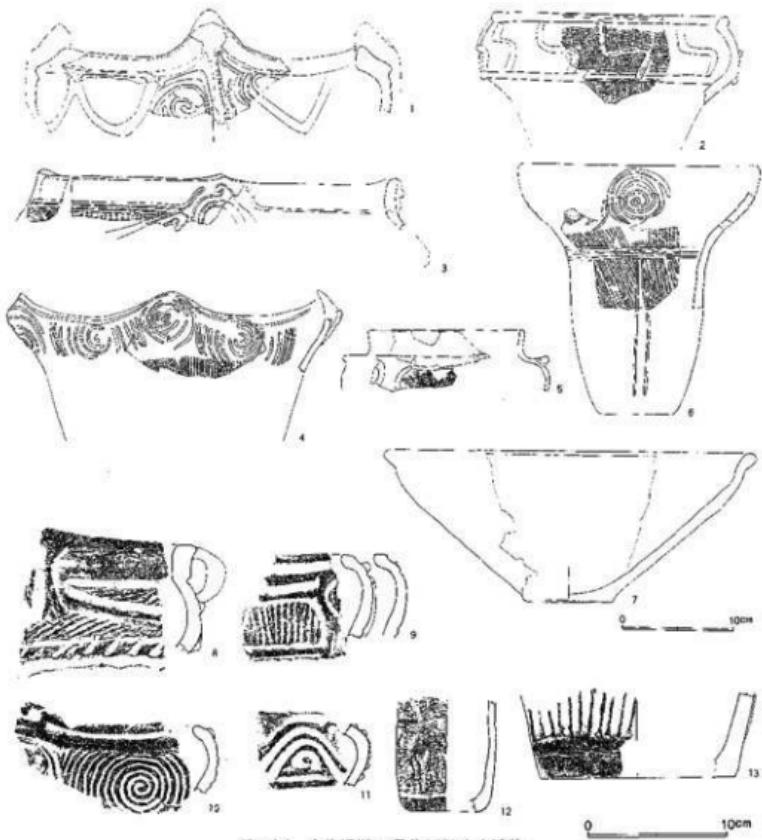
石器は7号住居跡と特定できるものは第24図4の磨石のみである。ほかの石器は重複した住居跡の覆土から出土したものであり、遺構を特定するには至らなかった。

8号・9号住居跡（第13図）

調査区南東端部に位置し、4号住居跡の東側で検出された。8号住居跡は土壤と重複しているが、



第11図 水道遺跡 6号住居跡出土遺跡

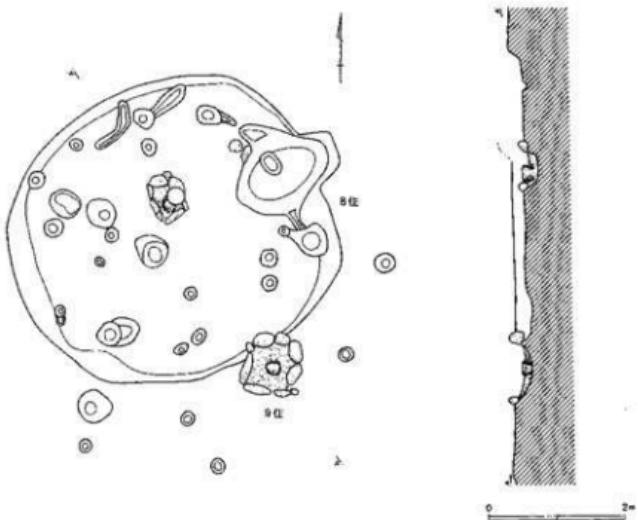


第12図 水岸遺跡 7号住居跡出土遺物

径が4.2～4.4mの隅丸方形の住居跡で、確認面からの深さは0.2m程度である。5本の主柱穴からなり、炉は主軸線上の北壁寄りに位置している。炉は石囲い炉で径が 0.5×0.7 mの長方形である。掘り込み周間に河原石を用いた縁石が埋設されていた。炉内には底部を欠いた深鉢形土器(第14図1)が埋設されていた。

9号住居跡は8号住居跡と重複し、炉が8号住居跡の壁を破壊して構築されていることや、炉内からの出土土器(第14図13～15)によって、8号住居跡に後続することが明らかである。柱穴からみて、径が4.6～5m前後の住居であったと推定される。柱穴は炉の周囲にも廻っており或いは拡張された可能性もある。炉は径が0.8m前後の方形の石囲い炉で、炉内には土器(第14図13)が埋設されていた。

8号住居跡出土遺物(第14図1～12)



第13図 水窪遺跡 8、9号住居跡

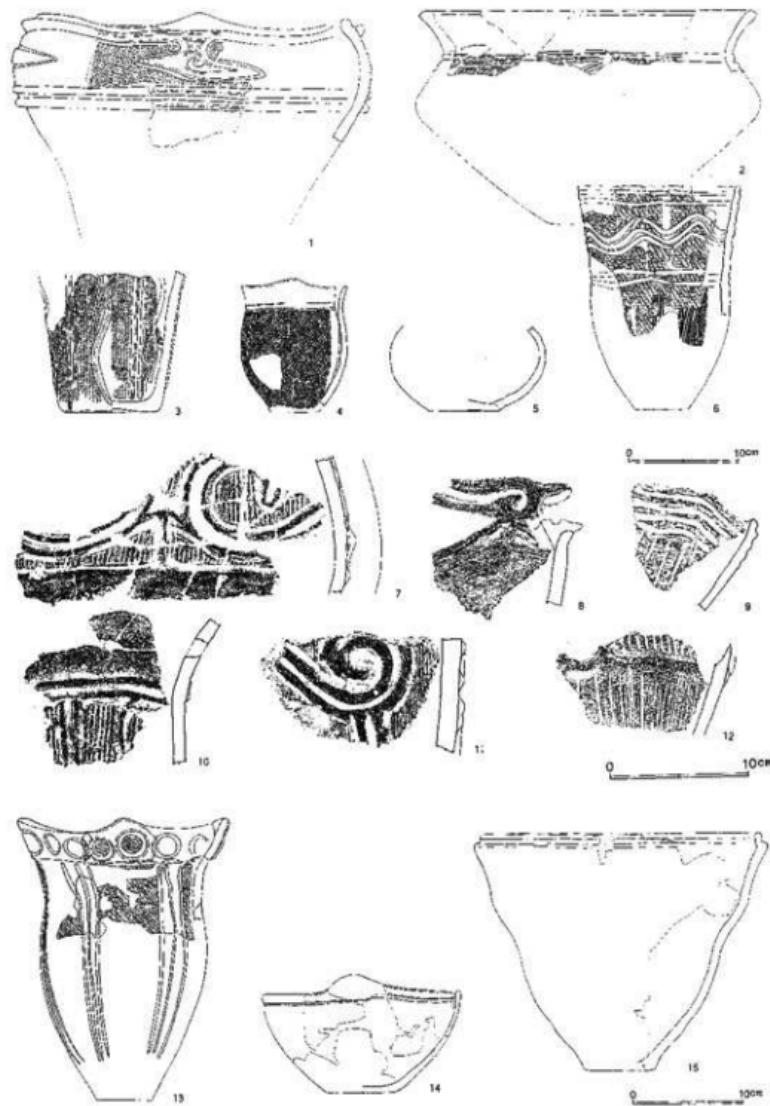
1の口縁部文様は、4単位の緩い波状口縁の深鉢形土器で上端区画に接して劍先状の単位文が配される。口縁部文様帯の幅が狭く、内湾傾向が強く、頸部には無文帯をもつ。10は無文部を挟んだ胴部文様で、3と同種の懸垂文配置である。文様は異なるが、7も同様の文様帶構成で、文様は2本隆帯で描かれる。2は胴上半に文様帯をもち、口縁部が外反する鉢形土器である。4は曾利式系の土器で、口縁部が無文で胴部が張る深鉢形土器である。8の無文の口頸部破片で、波頂部にはつなぎ弧文風の沈線がめぐる。6の連弧文は全体に長胴気味で、地文は胴上半が繩文、胴下半が櫛齒状の条線である。11は2本隆帯で渦巻文と懸垂文の配置を持ついわゆる渦巻文土器で、地文には条線が施されている。

9号住居跡出土遺物（第14図13～15）

13は石畠炉の埋設土器で、他は8号住居跡と重複する覆土中から出土した土器である。13は外反する4単位波状口縁の深鉢形土器である。口縁部文様帯幅が狭く、円形の沈線文様が多単位に配される。長胴で胴中央部が張る形態には、口縁部文様とともに曾利式系の影響がうかがえる。胴部の懸垂文は3条1単位であるが、口縁部との運動に欠け、沈線間の繩文が磨消される。14、15は無文で、14は口唇下に、15は内屈する口唇部に沈線がめぐる。

10A・B号住居跡（第15図）

10A号調査区北東端で検出された。15号住居跡に破壊されているが、いずれも大半が調査区域外にあるため全容が不明である。現存部分からみて、径が7.5m前後の住居跡と推定され、今回の調査で検出された最も大形の住居跡といえる。壁に沿って周溝がめぐるが、西壁と北壁側で途切れてい



第14図 水庭遺跡8、9号住居跡出土遺物

る。確認面からの深さは、周溝部分で0.4m前後、床面までの深さは約0.2mである。住居跡からは復元個体27個体を含め多量の遺物が出土した。なおこの住居の炉跡は検出されなかった。南壁寄りに位置する炉は、検出されたが体七器（第19図3）から新しい時期の所産で、10B号住居跡とした。かは径が0.6mの方形の石窯の炉である。遺物は炉体土器以外は出土しなかった。炉以外の施設も不明である。

10A号住居跡出土遺物（第17図～第19図、第23図1、6、12～14）

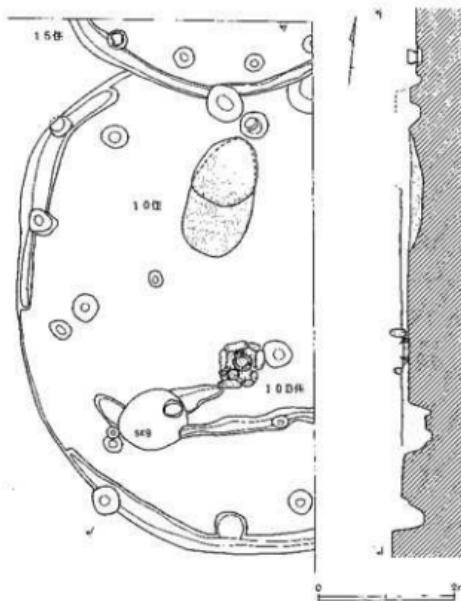
今回報告の住居跡で、最も遺物がまとまっている住居跡で、復元可能な土器が14個体出土している。第17図1～3、8は曾利式系土器である。1は外反する無文の口縁部をもち、口唇上は平坦に面取りされている。胴部は、横位の並行沈線が下半にまで及び、沈線上には棒状の浮文が交互に貼付され

る。胴下半から底部直上には蛇行する隆帯が貼付される。2も1と近い器形であるが、直線的に開く口縁が想定される。胴部には斜行沈線上に隆帯が垂下する。3は縱方向の沈線施工後に胴部の並行沈線が引かれ、器形や口唇部の3条の沈線相まって、連弧文との類似性が看取される。8はいわゆる胴部渦巻文の類で、3本沈線で文様が描出されている。胴部を上下方向から縱分割する沈線のうち、下方の沈線の一条が満巻状となっている。

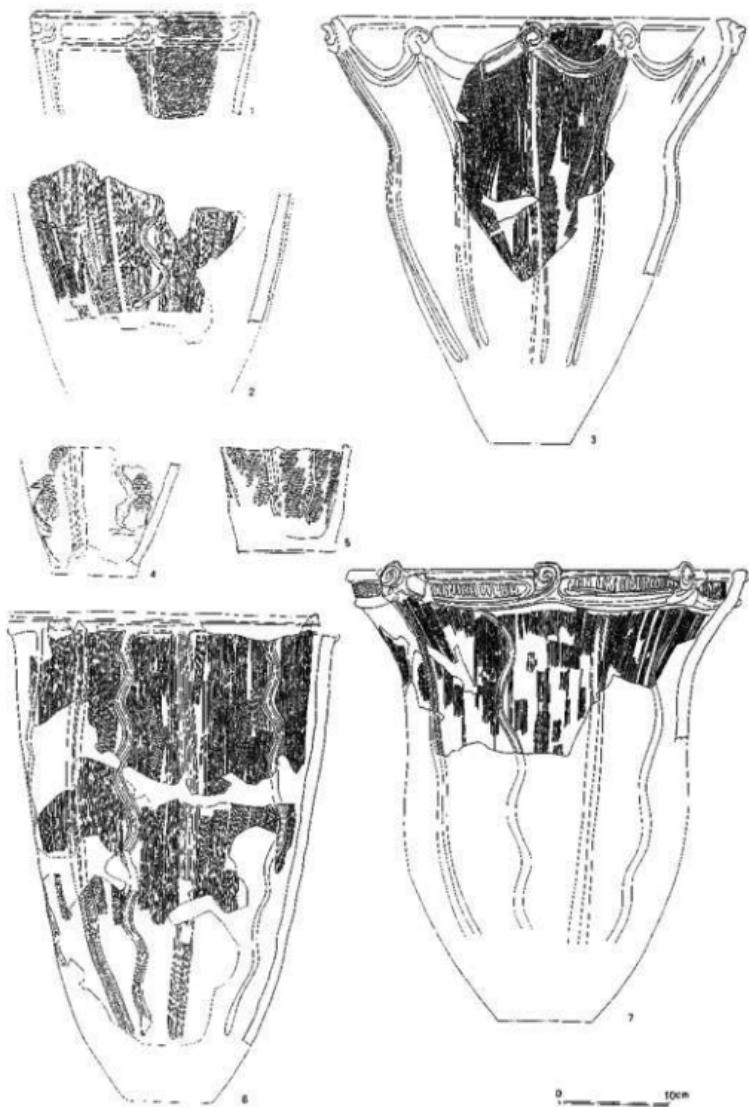
第17図9、第18図1、3～5、第19図11～15は連弧文土器である。器形も様々で、地文にも条線や撚糸、沈線などがあり一様ではない。口唇部に交叉刺突窓をもつのは第18図1の1例のみで、他は凸凹が全て3条の沈線でなされている。連弧文は3条の沈線で描かれるが、単位の細かいものや鋭く描かれるもの、連弧文の端部が文様帶区画の沈線と連結されるものなど様々な変異を見て取れる。第17図9、第18図3は連弧文間の地文が残されるが、他は連弧文間の地文が磨消されている。連弧文はくびれ部の沈線による分帶を境に上下二段に構成されるが、第18図3は下段の連弧分下に区画線をもち器面が三段に分帶される土器である。

第17図10、第18図2は口縁部を省略した土器である。地文は前者が条線、後者が撚糸で、ともに直線と蛇行の懸垂文が配される。

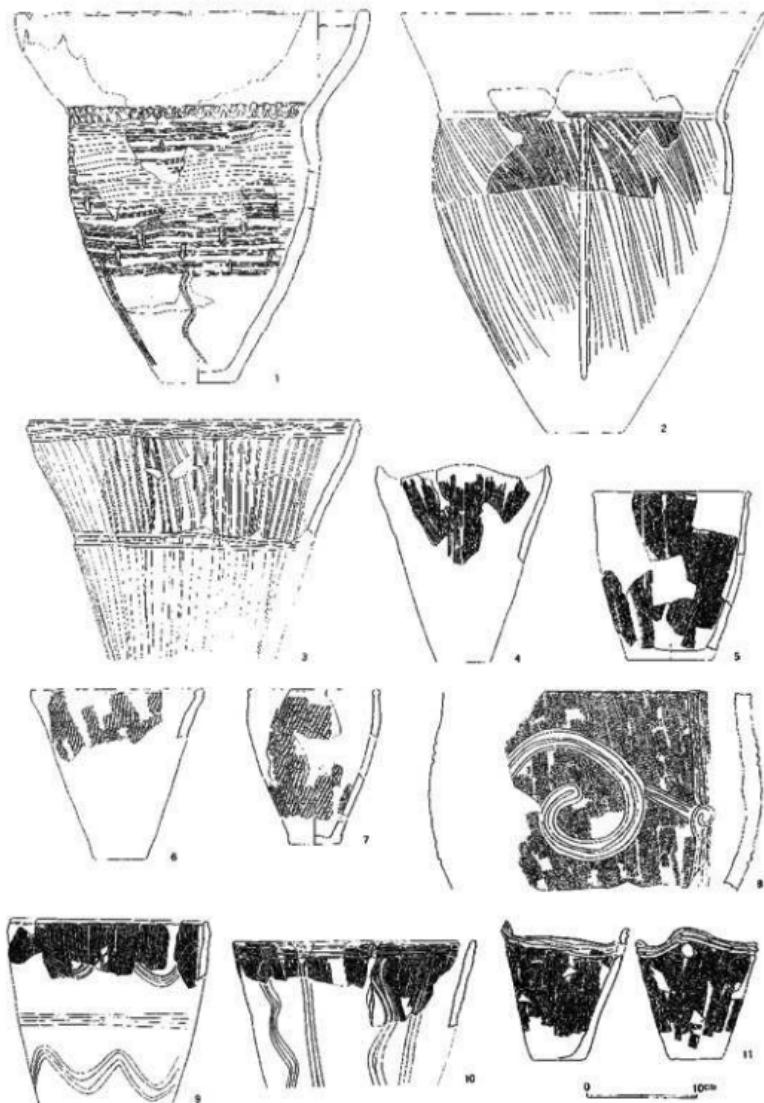
第18図6は胴部に文様を持ち、口縁部が外反する鉢形土器、同図7は無文の鉢形土器である。第



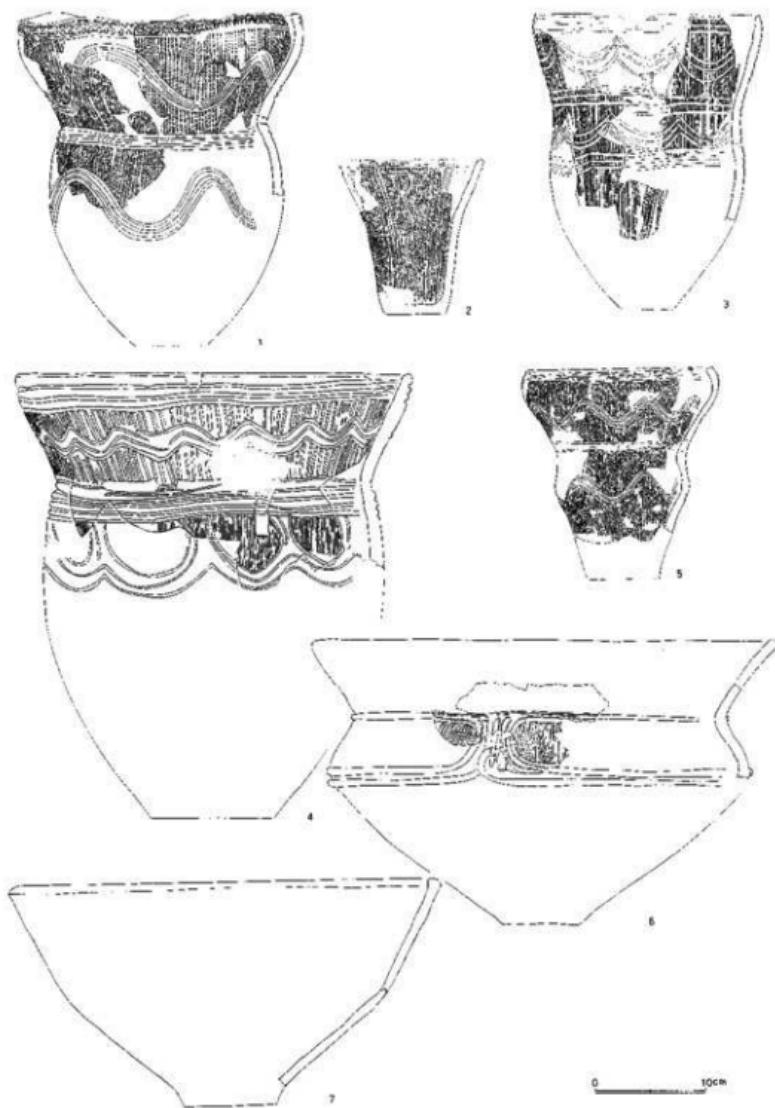
第15図 水窪遺跡10、10B、15号住居跡



第16図 水庭遺跡10号住居跡出土遺物（1）



第17図 水道路10号住居跡出土遺物（2）



第18図 水辺遺跡10号住居跡出土遺物（3）



第19図 水塗遺跡10号住居跡出土遺物(4)、10b号住居跡出土遺物

19図1は無文で隆帯がめぐる深鉢形土器である。

第19図4～10は加曾利E式系の口縁部文様帯をもつ土器とその胸部とみられる上器である。

10号住居跡出土土器（第19図3）

10号住居跡を破壊して構築された10号住居跡の石圓炉からは、埋設土器が検出された。第19図3は、直立気味で無文の口縁部と、丸みを持つ胴部からなり、両耳壺の形態を想起させる。胴部文様は、隆帯と円形刺突の交互刺突帯下に2単位の横S字状の文様が描かれる。両端が渦巻状となるほか、中央部には上下方向に突出する文様構成である。主文様間に独立した靴先状の単位文が挿入されている。充填繩文で、文様間は磨消されている。特に口縁には丁寧な磨きが施され、淡黄褐色の特異な土器である。器形には曾利式系に伴う特徴がうかがえる大木9式に並行する東北方面の影響を受けた土器であろうか。

石器は4点出土した。いずれも打製石斧である。刃部が片刃状で片側縁に抉入が加えられている。

11号住居跡（第20図）

調査区の北東端部にあり、12号と10号住居跡の中間に検出された。径が2.6m～2.8mの円形の住居跡で、確認面からの深さが0.1m程度の浅い住居跡である。壁の一部が土壤に破壊されている。住居の周間に柱穴がめぐるが、竪穴内の柱穴は1期のみで、炉も検出できなかった。遺物は出土していない。

12号住居跡（第10図）

7号住居跡と重複して検出された。東半分が調査区外のために全容は不明である。現存部分から推定すると、径が3m～3.6mで隅丸長方形の住居であると考えられる。長軸線上の北壁寄りに地床炉の一部が検出された。確認面からの深さは20cm程度である。壁に沿ってめぐる周溝は全周しない。柱穴は床面から0.6mと深く、4～5本柱穴の住居と考えられる。炉は床面からの深さが、最深部で20cmで、皿状に掘り込まれている。住居跡からは遺物が出土しなかったため、住居間の前後関係は不明である。

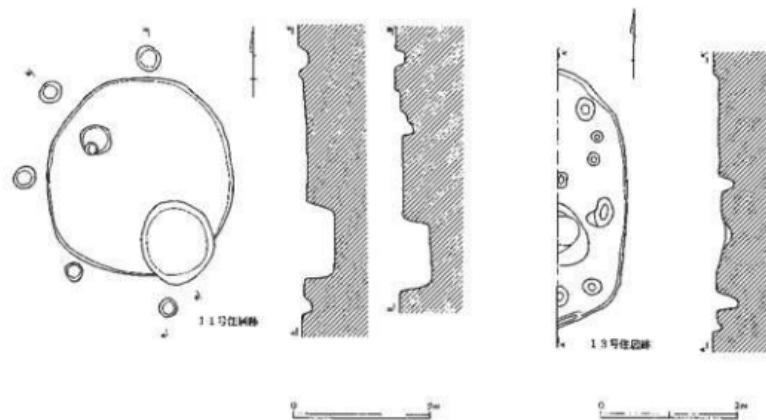
13号住居跡（第20図）

調査区の南西隅で検出された住居跡である。西半分が調査区外のために全容が不明だが、現存部分からみて、径が3.8～4m前後の隅丸（長）方形であると考えられる。確認面からの深さが10cm前後と極めて浅い。周溝は南壁に沿って検出されたが全周しない。地床炉は南壁よりで検出された。柱穴は壁寄りに検出されているが、位置関係が不明である。他の住居跡と比較しても、4～5本柱穴とみるのが妥当であろう。

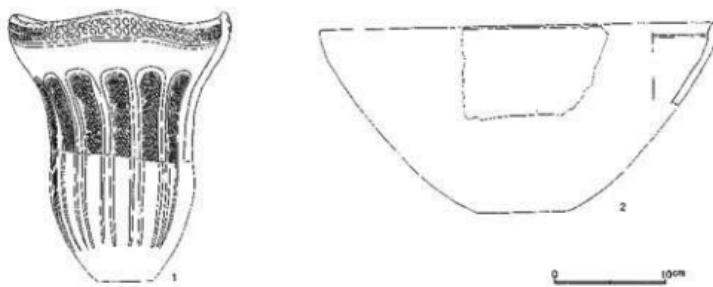
15号住居跡（第15図）

調査区北東隅にあり、10号住居跡を破壊して構築された住居跡である。南壁の一部が調査されただけで、ほとんどが調査区外にあるため、全容が不明である。確認面から床面までの深さが26cm、床面からの周溝の深さが10cmで、重複する10号住居跡よりも若干深く掘り込まれている。柱穴は壁に沿って検出されたが、出土遺物からみても、多柱穴で構成される可能性がある。床面からは、胸上半の深鉢形土器や、鉢形の大型破片（第21図2）が出土した。

15号住居跡出土遺物（第21図）



第20図 水窓遺跡11号、13号住居跡



第21図 水窓遺跡15号住居跡出土遺物

いずれも床面から出土した。1は口縁部に2列の刺突がめぐり、胴部には逆U字状の沈線文が描かれる。文様間にには網文が充填施文され、口縁直下から文様間には磨消されている。2は無文の浅鉢で、口唇内面に稜をもつ。

土壙（第22図）

1号土壙

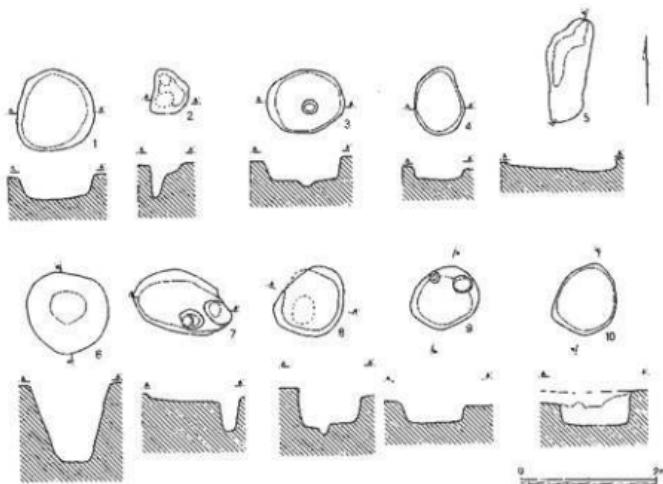
径1.2~1.1mの方形。深さ36cm。出土遺物はない。

2号土壙

径50~60cmの不整方形。深さ15cmで重複したピットの深さは44cm。出土遺物はない。

3号土壙

長径1.1m×短径0.8mの長方形。深さは30cm。出土遺物はない。



第22図 水窪遺跡土壤

4号土壙

長径1m×短径0.7mの不整長方形。深さ16cm。出土遺物はない。

5号土壙

長径1.16m×短径0.6mの不整長方形。深さ16cm。出土遺物はない。

6号土壙

径が1.2mで深さ1.1mの円形。出土遺物はない。

7号土壙

長径1.4m×短径0.8mの長方形で、6号住居跡と重複。深さ10cm。出土遺物はない。

8号土壙

径が1m前後の方形で、7号住居跡北西壁と重複。深さ52cm。ピットは7号住居跡の柱穴。出土遺物はない。

9号土壙

径が90cm前後の方形で、10号住居跡と重複。深さ30cm。出土遺物はない。

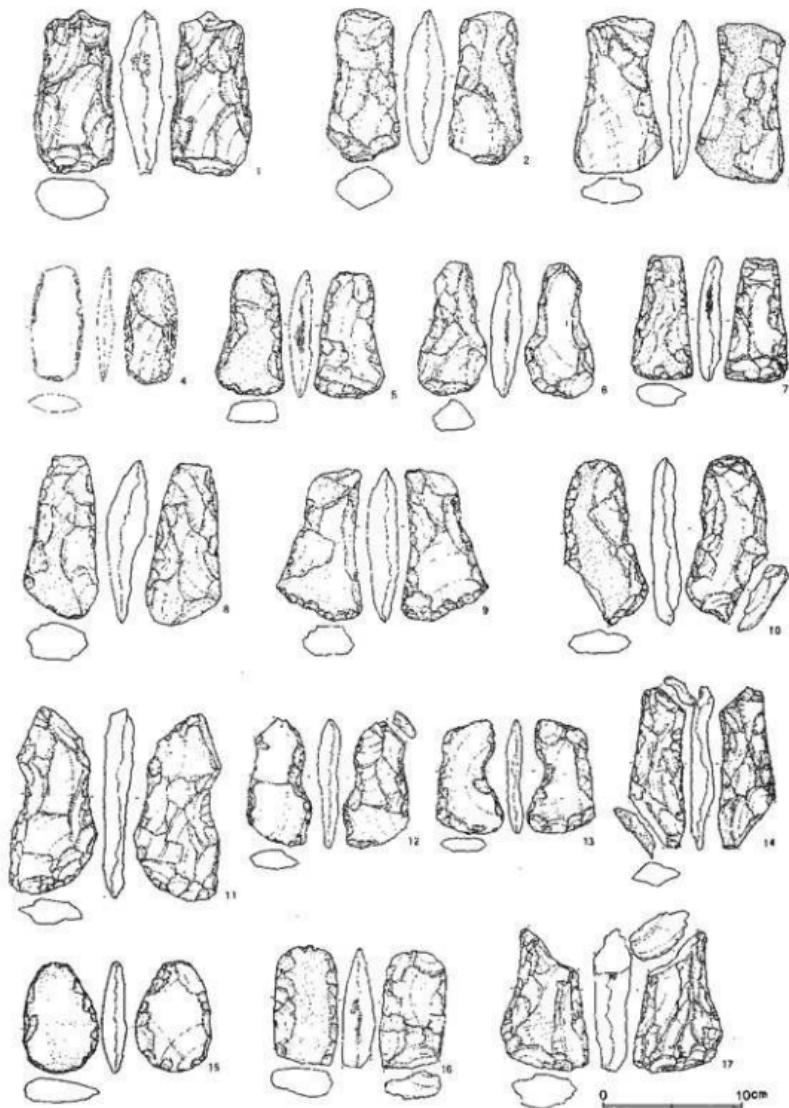
10号土壙

径が1m~0.8mの不整円形。深さ45cm。出土遺物はない。

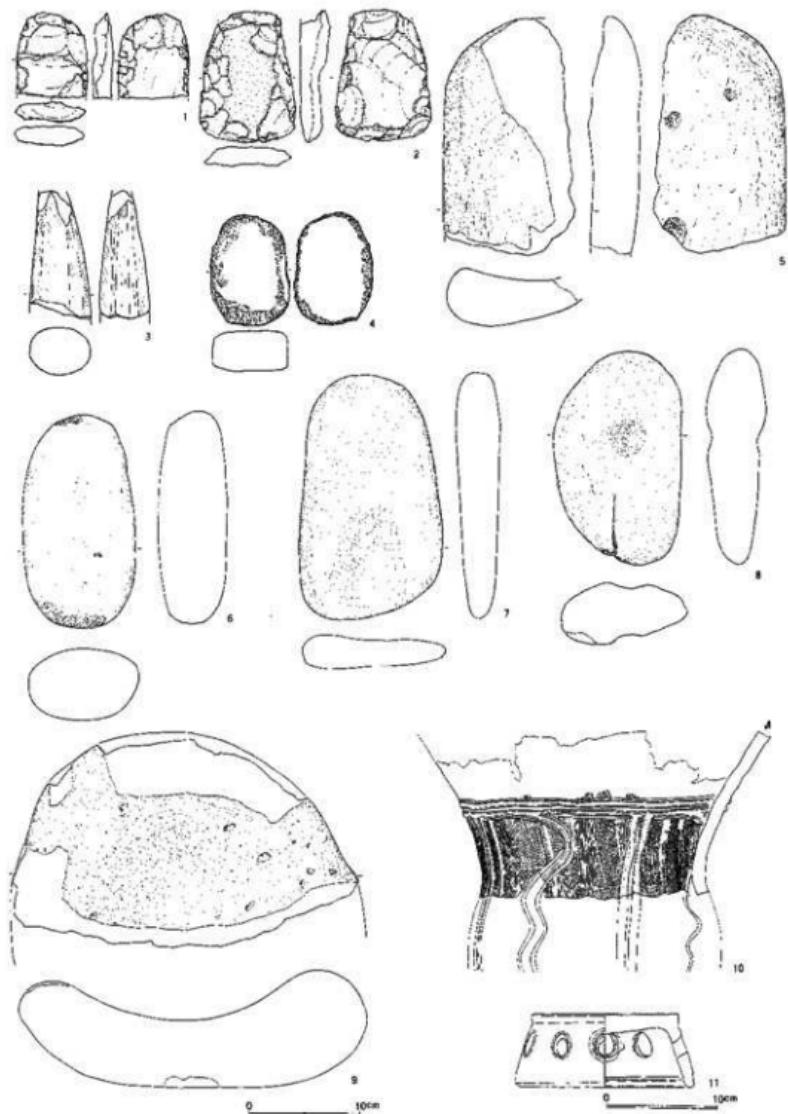
その他の遺物

グリッド出土土器（第24図10、11）

1は無文の頸部と張り気味の胴部を持つ深鉢で、条線Lに2条と1条の隆帯による直線、蛇行の懸垂文を持つ。隆帯側には部分的に沈線が加えられる。2は器台形土器で、9個の貫通孔をもつ。



第23图 水洞遗址出土石器（1）



第24図 水窪遺跡出土石器（2）

台上は丁寧にナデ整形されている。出土遺構の特定には至らなかった。

グリッド出土石器（第23図3、7、9、第24図3）

第23図に打製石斧を、第24図に磨製石斧を掲載した。打製石斧は短冊様で刃部が直線的な物と、刃部が片刃状のものがある。磨製石斧は乳棒状で、基部と刃部が欠損している。断面が梢円形で縦や斜め方向に擦痕が認められる。

巻頭写真解説

水跡で出土した代表的な土器を巻頭写真として掲載した。このなかには出土遺構が特定できなかったものが含まれるため。これらを併せて若干の解説を加えたい。

写真3～5、7～9、11～13は住居跡、他は包含層から出土した。

1～2、6、10が本文中に未掲載の土器である。1はキャリバー形の深鉢で、口縁部4単位の突起から垂下する鎖状の隆帯によって器面が区画される。口縁部は、環状の文様要素が連結される構成を持ち、空白部に三叉文が描かれる。隆帯上の沈線や刻みなどの形状も含め、7号住居跡に先行する井戸尻II式とするのが妥当であろう。10もこの時期と考えられる円筒状の深鉢で、無文口唇下に隆帯がめぐる。胴部には条線が施文される。

6はつなぎ弧文をもつ鉢形土器で、ほぼ完形である。区画内には網文が施文される。口縁部文様

| 番号 | 出土遺稿 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 石材 |
|-------|------------|-----|--------|-------|--------|---------|---------|
| 第23図1 | 10住 | 打斧 | 11.7 | 5.8 | 3.3 | 123.9 | ホルンフェルス |
| | 2 6・7住 | 打斧 | 11 | 5.2 | 3 | 158.4 | 砂岩 |
| | 3 | 打斧 | 11.2 | 6.2 | 2 | 151.4 | ホルンフェルス |
| | 4 1住 | 打斧 | 8.4 | 3.6 | 1.2 | 55.0 | 粘板岩 |
| | 5 6・7住 | 打斧 | 9 | 5 | 1.6 | 87.5 | 砂岩 |
| | 6 10住 | 打斧 | 9.6 | 5 | 2.2 | 95.4 | 砂岩 |
| | 7 | 打斧 | 8.9 | 4.5 | 1.7 | 78.9 | 安山岩 |
| | 8 6・7住 | 打斧 | 11.7 | 5.4 | 2.3 | 146.7 | 砂岩 |
| | 9 | 打斧 | 10.9 | 6.2 | 2.2 | | 砂岩 |
| | 10 4住 | 打斧 | 12 | 6 | 2.2 | 136.0 | 砂岩 |
| | 11 4住 | 打斧 | 9.2 | 4.7 | 1.6 | 200.3 | 砂岩 |
| | 12 10住 | 打斧 | 9.2 | 4.7 | 1.6 | 62.6 | 砂岩 |
| | 13 10住 | 打斧 | 8.1 | 4.8 | 1.1 | 53.7 | 砂岩 |
| | 14 10住 | 打斧 | 11.7 | 4.1 | 1.7 | 77.6 | 粘板岩 |
| | 15 4住 | 打斧 | 8 | 5.4 | 1.8 | 83.6 | 砂岩 |
| | 16 6・7住 | 打斧 | 8.6 | 4.7 | 2.3 | 108.0 | 砂岩 |
| | 17 4住 | 打斧 | 10.2 | 6.4 | 2.2 | 171.4 | 砂岩 |
| 第24図1 | 7住 | 打斧 | 6.1 | 5.1 | 1.5 | 61.3 | 砂岩 |
| | 2 | 打斧 | 9.4 | 6.9 | 2.2 | 157.6 | 砂岩 |
| | 3 | 磨斧 | 9.2 | 3.6 | 3.2 | 186.0 | 閃綠岩 |
| | 4 4住 | 敲石 | 8 | 5.7 | 2.9 | 225.3 | 砂岩 |
| | 5 4住 | 石皿 | 16.6 | 9.2 | 3.8 | 831.0 | 緑泥片岩 |
| | 6 1住 | 磨り石 | 15.2 | 7.8 | 5 | 894.6 | 砂岩 |
| | 7 3住 | 磨り石 | 17.3 | 10.4 | 3.2 | 760.2 | 砂岩 |
| | 8 4住 | 磨り石 | 15.2 | 9 | 4.5 | 779.5 | 砂岩 |
| | 9 4住 | 石皿 | 7.4 | 24.7 | 7.6 | 2,900.0 | 安山岩 |

以下が無文で、丁寧に器面整形された個体である。

IV 考察

1 水窪遺跡と周辺地域の土器群

加曾利E式土器には、現在までに蓄積された膨大な資料を背景とした数多くの先行研究がある。このような背景のもとに、土器の編年序列は既に共通理解が完成したとの一般的認識が生まれ、研究の中心が究極の細分を目指したものへと変容しつつある傾向が窺える。しかし、並行する土器群との整合的な関係性を追求する視点からみると、いままでの加曾利E式土器の変遷観が、從来意識されたほど完成されたものではなく、むしろ問題が山積していることが明らかになった。端的に言えば、曾利式や大木式などの変遷・系統観とのずれや重弧文の成立と展開に関する問題、E II・E IV式の認識上の問題などがあげられる。これらには、一方の命題としての土器細分が絡んでいたために、その範囲は拡大するかの觀がある。このような問題を回避するために、共伴関係にある資料をもとに、今一度変遷観を検討仕直すことが必要であろう。

かつて、筆者等が繩文中期土器群全体の再編を目指して行った検討（谷井ほか 1982）や中期後半から後期初頭にかけての検討（谷井・細田 1996）にも、現状からみると不備がある。水窪遺跡の報告にあたり、周辺遺跡を含めた加曾利E式土器を吟味し、上記の再検討を含めた土器群の変遷観を提示したい。

加曾利E I式前葉

この段階の資料には、水窪遺跡7号住居跡が基準となるであろう。水窪例は、6の平縁でクランク文をもつ東関東的な土器や4単位波状口縁で重弧文の土器（5、7）、4単位波状で鉛歯状の文様構成と見られる関東的な井戸尻III式的文様構成の土器（第12図1）がある。このほかに、井戸尻III式の円筒土器（第12図12）、中部井戸尻III式的な隆起線の土器（第12図13）などがある。全体に、中部関東の井戸尻III式系と、西部関東の加曾利E式系土器で構成されている。堂前遺跡（柳戸 1986）4号住居跡からは、西関東的な加曾利E I式土器を含まず、井戸尻系統末の土器組成のみで構成されることが特徴である。1、2の強く内溝する口縁部に隆帶文をもつ土器や13の鉢形土器には、中部地方の井戸尻III式的な様相が強くうかがえ、加曾利E式系土器がほとんど含まれないことが最大の特徴と言える。これらと対称的な組成をもつ土器群として、岩の上遺跡（柴原ほか 1973）23号住居跡出土土器（8～12）を示した。岩の上遺跡のキャリバー形土器に見られる横S字文の連結からなる文様構成の土器（11、12）に、西関東的な井戸尻III式土器（10）を伴出する土器組成は、水窪遺跡周辺の武藏野台地では、E I式前葉の一般的な土器組成と考えることができよう。地理的に近接した遺跡でありながらも土器組成や系統に差異がある一群として注目されよう。

加曾利E I式後葉

この時期には、坂東山遺跡（鹿島ほか 1992）54号（15、19、21）、60号住居跡（20、22、23）、堂前遺跡3号住居跡（16、17、25～28）、株木遺跡（柳戸 1993）1次6号住居跡（18、24）出土土器を基準資料とした。水窪遺跡周辺でもこの頃から遺構数・遺物量ともに急激に増加する傾向がみられる。加曾利E式系のキャリバー形土器では頸部に無文帯をもつものが多くなる。口縁部文様は、



第25図 加曾利E式編年図（1）

10、11の系譜上にある横S字状文が主体だが、蛇行する短縦帶による横S字文同志の連結から横S字文同志が発展し、横S字文とJ字文の連結のような文様構成（22、23）の土器が出現する。縦帶末端の渦巻の度合が強まることによって、渦巻つなぎ弧文の前駆的な文様構成をもつ上器が出現する。また文様末端が劍先状となる土器（23）が出現するのもこの時期の特徴といえよう。

この時期の曾利式系土器には、U字状懸垂文の土器が目立つ。中部地方の土器と比較しても遜色がないであろう。18の懸垂文の形態は、曾利式系の口縁部文様の形態に類似する。20は井戸尻III式系の土器であろう。

加曾利E II式前葉

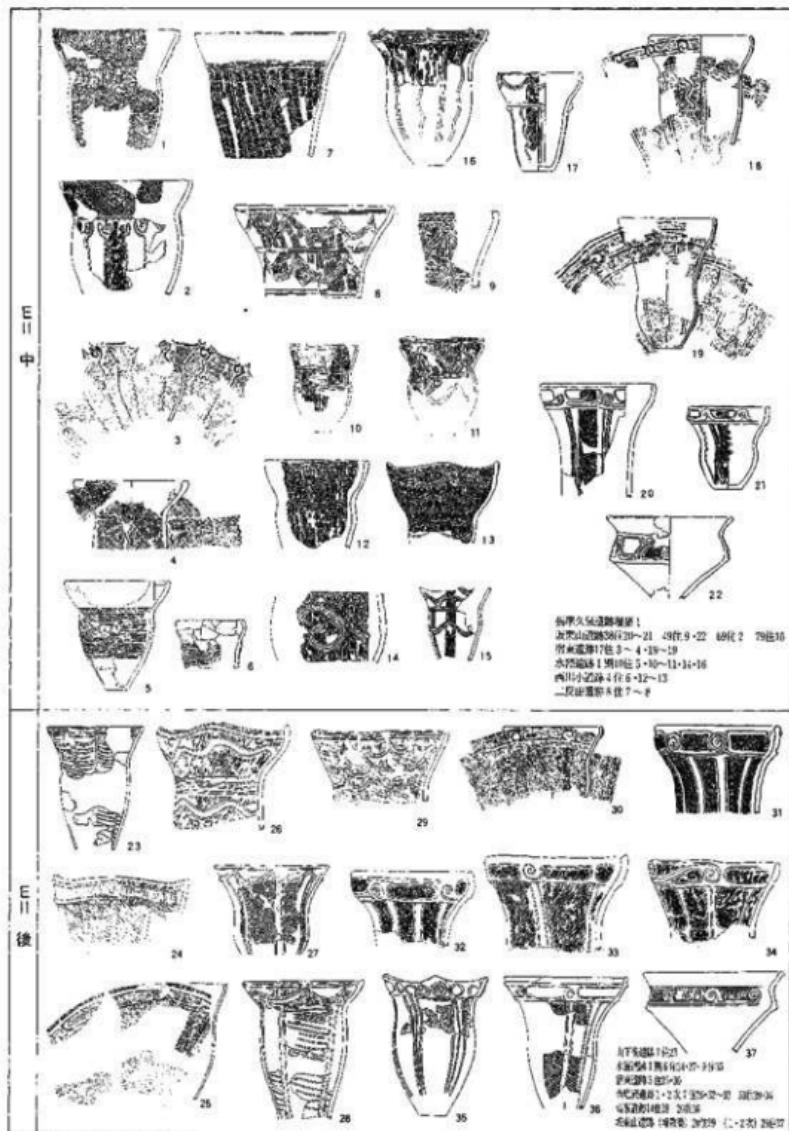
從来、加曾利E I式の末葉、さらに谷井の加曾利E I式直後型式を含めた内容の土器群である。この段階で頸部無文帯を欠くキャリバー形土器が出現する。土器の特徴は、E I式よりも、E II式の範囲でとらえたほうが、より合理的であることや、大木8b式や曾利式との関係からE II式に下げる考え方だ。連弧文出現以前にあたるこの時期の一括資料には、芋久保遺跡（宮元 1991）1号住居跡（31、33、35、36、45）、同5号住居跡（29、37、39、40）、二反田遺跡（岡本 1993）9号住居跡（38、41、42、44）、加能里遺跡（宮元ほか 1992）5号住居跡（32、34）などがあり、曾利式系土器との良好な共伴資料が報告されている。この段階の加曾利E式系キャリバー形土器には、38、39、42のように口縁部が直立気味で幅狭く、頸部無文帯をもつものが非常に目立つ存在となる。40は頸部無文帯をもたない土器だが、芋久保遺跡1号住居跡から曾利式系や39のキャリバー形土器と共に存しておらず、一括性が高い資料である。文様は38や39のように横S字やクランク文の文様要素をもつ土器も存在するが崩れており、42のように独立した満巻文と枠状区画の文様構成が見られるようになる。渦巻つなぎ弧文の土器（36、41、44、45）はこの時期に出現し、連弧文の成立に深くかかわる土器である。文様は多単位構成が非常に多く見られることから加曾利E式系の口縁部文様を土台に曾利式系の影響を受けて成立した土器であろう。

曾利式系の土器は、口縁部が外反する29、30のU字状懸垂文の土器や31、32のような胸部上半に横位多段構成の土器とともに、34、35、37のような加曾利E式系の懸垂文を配した土器が多く、両系の緊密な関係を物語っている。29は一見古相の土器と思われるが、伴出した39、40の例からこの段階に設定した。30は坂東山遺跡38号住居跡から出土した。住居跡からは39近似の資料や第26回20、21のように明らかに下る時期の土器が含まれており、2時期に分けて考えた。文様構成や加飾手法などから曾利II式の典型とされた土器に近い。

加曾利E II式中葉

この時期が最も遺構数が多く出土量も豊富で、土器組成からみて最も安定した状況にある。従って、曾利式系土器との共伴関係も捉えやすい。連弧文が出現する段階として評価されるが、文様形態や施文上の特徴を反映してか、連弧文自体にも変形した土器が多く存在しているため、これらを単純に時間差としてとらえやすい傾向であろう。加曾利E式系のほかの土器群を比較すると細分はむづかしく、同一時間幅のなかでのバラエティーとみるべきであろう。

この時期の資料には、水窪遺跡I期10号住居跡（5、10、11、14、16）が一括資料として評価される。資料的には少ないが、3号住居跡、4号住居跡出土土器の一部がこの時期の資料といえよう。



第26圖 加普利亞式編年圖（2）

周辺では、宿東遺跡（中平・1994）7次11号住居跡（3、4、18、19）、西川小学校遺跡（曾根原ほか・1992）（6、12、13）が曾利式系土器を含めて良好な組成を持つ資料である。このほかに二反田遺跡8号住居跡（第26図7～8）、坂東山遺跡38号住居跡の一部（20、21）、49号住居跡（9、22）、69号住居跡（2）、79号住居跡（15、17）出土土器がこの時期の資料といえる。

加曾利E式系の深鉢形土器には、口縁部が湾曲気味に開く個体が多い。この傾向は、例えば2～5の曾利式系の土器の素文の口縁部においても共通性がうかがえ、キャリバー形土器の隆筋を除いた器形では曾利式系土器との判別が困難な個体が多い。

キャリバー形土器では口縁部文様帯の幅の狭い個体が多い。18の文様構成は、明らかに前時期の第25図42の系譜を引くが、沈線が口縁部文様帯下端区画の隆筋と連続しており、表現形態は異なるものの、16のつなぎ弧文と同じ構成原理といえる。胴部の懸垂文は、18、19のような沈線が並走する隆筋のものと20、21の沈線によるものとがある。後者は3本沈線による懸垂文で隆筋の置換といえる。沈線間隔も狭く、口縁部文様も18と近いこと、及びほかの件出土器からこの時期と考えた。

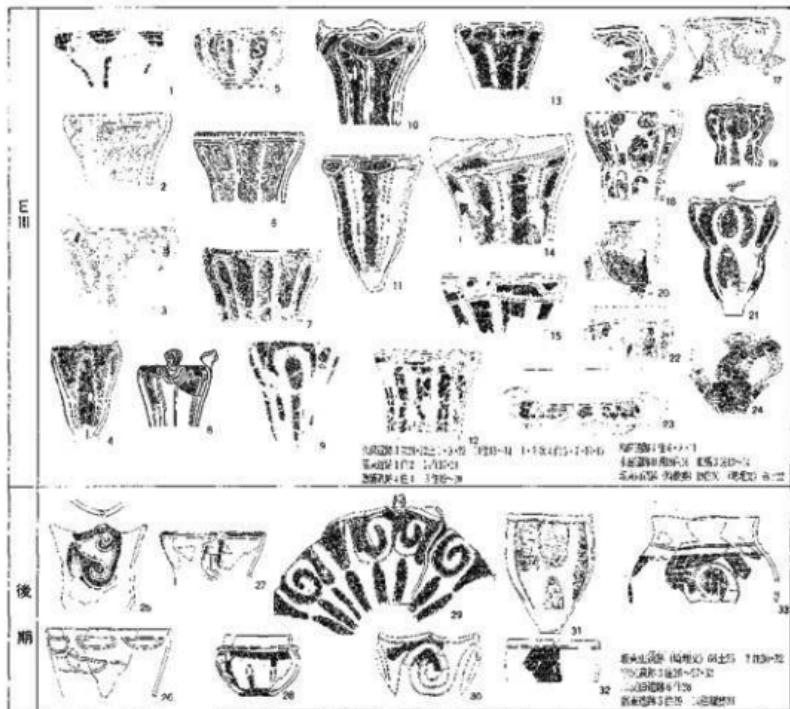
連弧文土器には、地文が条線のものや燃糸のものなどが認められる。文様描出は、単沈線や半裁竹青の重複施文による3条1単位の文様構成を旨とし、11、12のように、胴中位のくびれ部を境に2帯に分帶されるものや、8、10のように文様構成が多段となるもの、13、15のように連弧文が交互多段に施文されるものなど様々である。連弧文土器の施文上の特徴とされる交互刺突帯も通観すると以外と少ない。9は連弧文の接点に渦巻文が描かれる土器であるが、この文様からもつなぎ弧文との関係がよくわかる資料である。15は坂東山遺跡79号住居跡から17と出土した。沈線間の繩文がなでで消えている。連弧文は、沈線施文上の特徴からか、沈線間の地文が消えた個体も多い。このような手法がやがて磨消繩文へとつながり、26のような土器を生み出すとともにほかの土器群にも積極的に採用され、加曾利E式系土器の文様構造そのものに変化を促すのであろう。

この時期の曾利式系土器には、口縁部に斜行沈線文や重弧文をもつ土器や無文口縁の土器がある。1～6は曾利式の典型例に近い土器である。1、4、14は胴部に渦巻文が描かれる例、5は横位沈線上に貼付文が加えられる例である。7は隆筋による懸垂文をもつ例で、18、19の懸垂文に酷似し、加曾利E式系との関係を彷彿とさせる。

加曾利E II式後葉

この段階の資料は前時期に比較して少ないが、水窪遺跡I期6号住居跡（24、27）、宿東遺跡5号住居跡（25、30）、金堀沢遺跡1・2次53住（21、34）、7号住居跡（26、32、33）に比較的まとまつた資料がある。加曾利E式系のキャリバー形土器には、口縁部文様と胴部懸垂文との対応関係が崩れる土器が現れる。頸部無文帯の土器がみられなくなり、磨消懸垂文が口縁部区画線に沿って垂下する土器が多い。31の坂東山遺跡（埼玉県）例は、加曾利E II式の典型例とした土器であるが、土器群の比較からこの時期に下げて考えた。懸垂文には24、36のように、末端が閉塞したり、30のように口縁部区画線に沿って沈線が並走する土器が認められる。34は29との共伴例だが、胴部に隆筋の置換によって生成したH状の磨消懸垂文をもつ例である。曾利式系の影響下に24、25のように、本来の繩文施文部が沈線に置換された折衷形の上器も存在する。

岡示した資料中に曾利そのものと評価される資料はみあたらない。加曾利E式系を基本に充填手



第27図 加曾利E式編年図（3）

法を置換した土器がほとんどである。この傾向はE III式に至って一層顕著となる。27、28は、口縁部文様直下に懸垂文が描かれており、16のつなぎ弧文の土器との連動が顕著にうかがえる。28は懸垂文の上端が連結された例である。この時期に頸部無文帯が消失し、口縁部に接して懸垂文が描かれる土器が多く出することも、このような土器群との対比で考えることができよう。35の口縁部文様に多単位の円形文様が配される点は、逆に曾利式系の文様構成とも関連するようである。

加曾利E III式

中期末葉に位置付けられる段階である。従来、加曾利E III式古段階と新段階とに区分されていた土器群を再検討し、1時期として評価仕直したものである。前時期に出現した磨消細文と文様意匠の沈線化や単位文化が急速に波及した時期と考えられる。10の坂東山遺跡（崎教委）は、かつて加曾利E III式あるいはE III式古段階としたが、土器群の比較からこの時期に下げて考えた。

この時期の資料には、久保遺跡3次21・22号土壤（齊藤 1996）（1、9、21）、11号住居跡（5、23）、1・2次4号住居跡（野村 1994）（3、7、12、16）、坂東山遺跡（崎教委）19号住居跡（10）、（崎地文）48土壤（22）、宿東遺跡1次1号住居跡（2）、9、10次14号住居跡、久保遺跡（齊藤は

か（1994）4号住居跡（3、7、12、15）、水窪遺跡II期18号住居跡（18）、III期3号住居跡（13、14）、櫛棚遺跡（市教委）（並木ほか 1987）3号住居跡（19、20）、和田遺跡（並木ほか 1986）1号住居跡（6、8、11）などがあげられる。10～15の加曾利E式の深鉢形土器をみると、口縁部文様帶の描出が墻帯から沈線で横S字（10、14、15）やクランク状（12）の意匠が口縁部に描かれていることに気付く。前時期にみられた口縁部文様と胴部懸垂文との関係は、一層運動性がなくなり、磨消懸垂文にも幅広いものが多出する。このような文様描出法の変化は、つなぎ弧文や連弧文との変容過程とも連動する現象であろう。

2～9が口縁部文様帶をもたない土器群で、2～4、7、8が吉井城山類型と呼称された土器である。1は口縁部文様帶系との変形で、吉井城山類の生成を物語る土器である。1、2が加曾利E II式後葉の上器（第26図27、28）の系譜をひくことから、懸垂文と弧線が一体化し、吉井城山類を生成したことが明らかとなろう。胴部に区画線を持たないことが通常であることから、吉井城山類が12のように口縁部文様帶系の変容を促したことも考慮しなければならないだろう。

口縁部文様帶系の土器と吉井城山類や23、24の両耳壺形土器とは、しばしば住居跡での伴出関係があることから、同一時期として把握することができる。一方、18～20、22の吉井城山類の変形とされたいわゆる抱球文の土器は、束闇東では17の胴部渦巻文をもつ梶山類と共存し、先の上器群とは伴出関係に乏しいことから、時期的に区分し、加曾利E IV式やE III式新段階として扱ってきた。16の胴部渦巻文と17の土器は文様構成が酷似し、17は16の文様を2条の沈線で描いた土器であることがわかる。胴部渦巻文土器にもバラエティーがあるが、胴上半に渦巻文、下半が懸垂文の構成をみると、18、19、21は胴部渦巻文と文様構成で関係の強い土器であることがわかる。この類の土器は柄鏡形（數石）住居跡から出土する傾向が強いことも考慮すべきであろう。地域は異なるが、騎西町修理山遺跡（吉田 1995）6号住居跡や北本市上手遺跡（笠森ほか 1989）J1号住居跡、神奈川県洋光台猿田遺跡（山本 1993）10号住居跡出土土器などから、口縁部文様帶系や吉井城山類、梶山類、抱球文類が同一時期幅での系統差を含む土器群として把握できると考える。

後期初頭の土器

この地域の後期初頭の土器群には、例えば紡垂文を基調とする中津式やその影響下に生成した土器群を、造構単位の一括資料として抽出することができない。このような状況は、この地域に限らず、むしろ中津式の影響が直接的に及ばない地域や遺跡に共通の現象で、この間には加曾利E式系の存在を無視できないであろう。

この時期には坂東山遺跡（崎垣文）66号土壙（25）、2号住居跡（30、32）、宇尻遺跡（石塚 1995）3号住居跡（26、27、33）、二反田遺跡6号住居跡（28）、宿東遺跡9・10次住居跡埋甕（31）、4次3号住居跡（31）がある。宇尻遺跡出土土器には興味深い特徴がある。図示した資料はいずれも覆土中から出土したが、26の窓枠状区画文には中津式周辺で出土する棒状区画文に酷似した特徴が認められる。27のJ字文は、称名寺1段階（鈴木徳 1990A、1990B）に見られる2段J字文の土器に相当し、文様構造上では加曾利E式系の様相が強い土器といえよう。29、30は、かつて後期E IV式に比定した前原遺跡（C・T・キーリー 1976）4号住居跡出土土器に近く、中期終末のJ字文とは様相が異なる土器である。後期初頭の中津式系とされるJ字（状渦巻）文も、紡垂文からの変

化をたどることはむつかしく、文様構造を含めて加曾利E式系からの影響を考えるべきであろう。挿図にはないが、この時期の加曾利E式系には、細く鋭利な沈線による龜齒状文や微隆起線の土器も並存する。

2 水窪遺跡と曾利式土器

曾利式の研究は井戸尻編年以来、多くの研究が積み重ねられ、井戸尻式終末、曾利I式等の細分、IIIa式、b式の問題など様々な疑問が提出されてきた。また、従来の編年にもこだわりながら、14~17段階に細分を試みた殿戸遺跡編年案(百瀬ほか 1987)、あるいは积迦堂遺跡の従来の編年枠と異なる曾利式古段階、新段階に2大別し、それぞれを細分する案(小野ほか 1987)が提出されている。

1980年には関東、中部の相互関係を視野に入れながら横断的に検討を加える機会があった(神奈川考古同人会)。唐草文土器の提唱があったほか、それぞれの地域で曾利式・唐草文土器が交差的に出土することも明らかにされた。中部側からは関東曾利式土器は中部の曾利式と異なり、関東的に変形されているのではないかといった重要な指摘もあった(藤森ほか 1965)。このシンポジウムは相互のずれが大きかったとはいっても現在進められている広域に跨がった研究会のはしりとなる西期的な研究会であった。しかし、その後の曾利式研究は兎極の細分を目指すといった流れに乗り、地域内編年、純粹曾利式の抽出へと戻っていったようである。

ここでは、前項の加曾利E式細分を基準とし、中部で出土した加曾利E式系土器の共伴した曾利式を手がかりとして序列案を示し、水窪遺跡の曾利式土器について若干検討したい。

加曾利E I式前半……积迦堂遺跡III-10号住居跡(長沢ほか 1987)

10号住居跡は11号住居跡と完全に重なっており、10号住居跡の覆土下半はパックされた状態であった。2は炉体土器。加曾利E式系の1は口縁が大きく内曲し胴部の張る重弧文の素形、澁久保的、櫛形文的口縁と共に、水窪遺跡2期9号住居跡の重弧文の素形、胴部の櫛型文のモチーフの土器と関係する。各種の要素から時期は明示できるが、明らかな加曾利E式ともいえず、まして曾利式とはいえない土器である。2は横帯区画線が切れ目なく一周する手法から井戸尻III式とされる。3から9までは地文に条線文を持つが、3は勝坂式の要素が多く残り従来の分類では曾利式といえない。

この一群はその特徴から井戸尻式から曾利式、加曾利E式系土器が複雑に交差した土器群で、東京都狐塚遺跡(服部 1971)をはじめ、中部・関東の多くの遺跡でこの組み合わせて存在する。従来の型式を至上とすると認めがたい組み合わせであるが、型式概念に拘泥せず、炉体土器から覆土までを一定の時間幅に収ることが確実なことを考えれば、この組み合わせを認め、検討を進める必要がある。この前提に立てば、井戸尻III式、曾利I式古段階が加曾利E I式前半に並行することとなる。

加曾利E I式後半……居沢尾根遺跡(島田ほか 1981) 1号住居跡、7号住居跡

1号住居跡の出土土器は覆土下層に収る。1号住居跡は7と類似した炉体土器。2個体の埋甕である有孔鑄付き土器のほかは覆土下層からの出土である。11はクランク文の付く口縁部文様帶をもち、明らかな東関東系加曾利E式土器。前段階にもあるモチーフであるが、基本形の崩れがみられ

ること、把手頂部に巻く満巻の存在、伴出曾利式の組み合わせからこの段階に下がった。12は剣先文を持つ浅鉢、クランク文もみられる。鶴型文系土器、井戸尻皿式系土器、素形連弧文、U字懸垂文、頸部格子貼付文等があり、曾利式の基準資料曾利遺跡（藤森・武藤 1964）4号住居跡に近い組み合わせである。

加曾利E II式前半……東京都留原遺跡（森田ほか 1987）1号住居跡

遺物の大半は埴上層から出土。投棄されたものであるが、中央に集中し、一枚の面と理解される。27個体あった。加曾利E式土器のほか、多量な曾利式系土器がある。一部連弧文土器の新しい段階、内湾する口縁部に地文繩文の加わった新しいと考えられるものであった。

加曾利E式系として19、20、22を図示したが、ほかに頸部無文帯を欠く土器も加わる。口縁の溝巻文は集約され、溝巻文、梢円区画文の並びが基本となる。地文繩文の土器として、連弧文の素形と考えられるつなぎ弧文、弧文連結部の集約され飛出した溝巻文、括れ部から直線的に開く東関東系の器形などをもつ土器がある。曾利式系土器では胸部に17のようなU字懸垂文の25の七器、重弧文の口縁部に格子貼付文のつく土器、胸部上半に幅広い平行沈線群が置かれる土器がある。24の中部北半で一般的な区画内綫杉松線文の土器も加わる。25、27の懸垂文は曾利I式の系譜上にある。従来の曾利式編年ではII式であるが、明らかなI式の要素を引きずっている段階といえよう。

加曾利E II式中葉……山梨県関山I遺跡（中山 1988）、駿迦堂遺跡S IV区17号住居跡

連弧文が出現する段階。関山I遺跡1号住居跡は5角形、5本柱穴をもつ。炉は北壁よりに埋甕があった。遺物は埋甕を除くと、床面から浮いて出土した。駿迦堂遺跡S IV～17号住居跡は掘り込みが検出されていないが、石門炉があり、周辺出土遺物をまとめて17号住居跡出土としたようである。中部では連弧文の出現は遅れ、次の段階が主流であるが、関山I遺跡の連弧文がこの段階でよいとすれば、最古例であろう。29はつなぎ弧文のキャリバー系土器。30も加曾利E式系であるが、胸部上半の器形は連弧文的、口縁部の溝巻文は集約された曾利式的である。31から34が曾利式系土器、31はX字把手があり、新しい要素といえるが、胸部の溝巻的懸垂文の手法は曾利I式的。32、33は重弧文土器。前段階26より退化型式は明らかである。

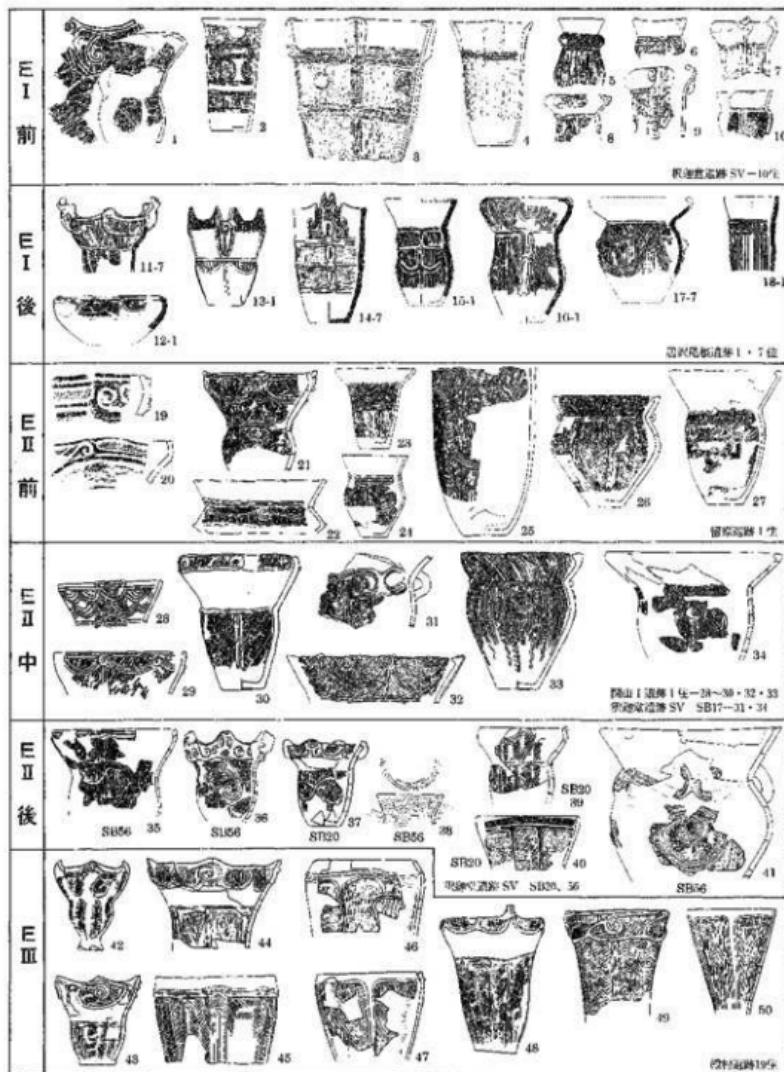
加曾利E II式後葉……駿迦堂遺跡S IV区SB20号住居跡・56号住居跡

SB20号住居跡では胸部に2段の区画懸垂文のある埋甕のほか、覆土中の出土。SB56号住居跡は磨消懸垂文のある加曾利E式キャリバー形土器胸部が埋甕で採用されていた。35の連弧文の土器は胸部に2段の連弧文がある。口縁部は連弧を欠き、地文条線のみ。36、37はいずれも縦帶状口縁部に円形文、S字梢円区画の組み合い、曾利式後半特有の口縁部文様帯をとる。胸部にはS字隆帯文、U字懸垂の退化型式の胸部隆帯がみられる。無文帯口縁部系の土器でも胸部には横展開の大柄溝巻文が定着する。40は懸垂文上端を直線で連結した箱状懸垂文のみの土器。ほかの例からも口縁部消失がはじまる段階とも考えられる。従来の編年あてると曾利IV式となろう。

加曾利E III式……殿村遺跡19号住居跡

殿村遺跡は松本市の西に位置し、北信に近い。今回主に取り上げた遺跡とは離れているが、かつて加曾利E IV式と呼んだ土器が伴っていたため選んだ。

住居跡形態は埋甕2個体が縦に並ぶ部分を頂部とした5角形。炉と埋甕の距離が離れているなど



第28図 加曾利E式、曾利式関係対比表（1）

から炉と埋甕の距離が近接した柄鏡住居跡系列ではなく、中部の一般的な住居形態である。遺物の出土状況は45や加曾利E式両耳壺系上器が埋甕であった。ほかは廻棄されたように覆土中から出土。

報告者は埋壙→覆土下層→上層の自然的序列から殿村遺跡では11段階から13段階としたが、遺物出土状況のドット図からも積極的な根拠は見出しがたい。埋壙埋設→覆土堆積には絶対的時間差が存在するが、壙壙の土器が副体差を越えて時間差を明示した分析はなく、現在、ほかの遺跡でも追認させる例は未だないであろう。基本的には一定の時間幅に収る土器としておいた方が適切であり、多様性の表現形態と理解して進めることができると適切である。

42は吉井城山類の波状文と懸垂文が上下に分帶された、いわゆる加曾利E IV式タイプで、ほかに1個体ある。43、44、48、49は口縁部文様帯と胴部懸垂文に分れる加曾利E式系の文様帯分帶をもつ土器。文様帯としては頸部無文帯のある置く30の土器を引く。一方に頸部無文帯を置かないより加曾利E式の土器も存在する。中部では舟利II式以降この構成の土器が急増する。43は口縁部の渦巻文の代りに隆帯で囲まれたJ字文がある。ほかにJ字文の下半が垂下し、器面全面を埋める土器がある。これらには器形、文様分帶、文様帯、充填手法、文様要素など様々な交換関係による表現を読み取れるタイプが存在する。

45~47は椿形の唐草文系土器。46には崩れた唐草文があるが、ほかは隆帯懸垂文に代る。唐草文では上端区画線と渦巻文を隆帯でつないでおり、大木式椿形土器の系譜上にあることを示す。47の区画線に沿った刺突列の手法は三十種葉式へ連なる要素である。

50は40、47にみられる懸垂文と同タイプの懸垂文で、曾利式の典型とされる懸垂文であるが、地文は綾杉沈線列で埋められる点や上端区画線に沿ったC字状刺突列は北信的である。

本例を従来の加曾利E式の編年觀に照してみれば明らかに矛盾した組み合わせであり、関東加曾利E式と対比すると、自ずと住居跡内細分へ向うことになる。前段で検討したように関東の場合吉井城山類の土器は柄鏡型住居跡と結びつき、従来の加曾利E III式と明らかな共伴関係がないことなどから中期終末加曾利E IV式として一段階を設けた。しかし、後期段階ではより退化していることやE III、E IV式とみなされた住居跡共伴土器を多重に交差させると確実な一段階を設定しにくいこと、大木式との並行関係からも介在する余地がないことなどから両者を合せて一段階とすることを提唱した。今回曾利式系土器の検索をとおして本例の存在に気付いた。偶然であったが、従来の加曾利E式III、IV式の関係を知る住居跡の組み合わせとしては最も適切な例として重要なカギとなると考え取り上げた。

次に、この編年軸を参照として水窪遺跡の出土した曾利式系土器を若手検討してみよう。

水窪遺跡は過去3回の調査が行われているが、曾利式土器群から良好な住居跡例は人間市調査第3期9号住居跡例と今回報告の第1期10号住居跡例であろう。

3期9号住居跡例はS字渦巻文の口縁部文様帯の西関東型キャリバー形土器の典型をもつ加曾利E I式前半段階である。伴出土器は勝坂式系土器、褶曲文あるいは重弧文の素形の土器がある。いずれも器形は共通し、内湾した口縁部、直線的な胴部上半、膨らみをもつ副部下半となる。文様帯の配置は口縁部文様帯、頸部素文帯、副部文様帯である。このような器形・文様帯の基本形は櫛型文にあり、遠久保タイプもこの変形である。

褶曲文の口縁部の土器は内湾度が強く、胴部は無文となり、直線的に立つ。胴部下半は地文の縦条線文に櫛型文胴部の連弧状区画が並ぶものが1個体ある。所々に勝坂式の施文手法がみられるが、

基本は条線が主であり、曾利式的色彩の強い土器である。

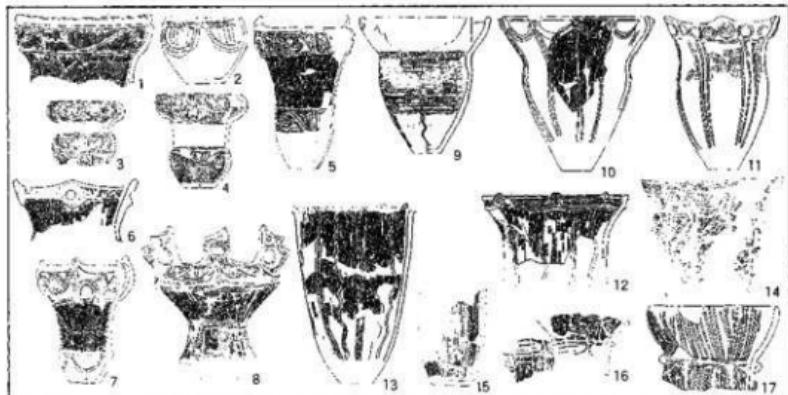
勝坂式の色彩の強い例は加曾利E式系の器形から影響を受けたせいか、縦長になっている。口縁部はキャリバー形の口縁部幅と同様である。口縁部及び胴部下半の文様帶は横帯区画文の1帯分が採用されたとみなせる。中部での横帯が明確な区画線で区切られる傾向と同調している。

同時期と考えられる12号住居跡例では武藏野台地稲勝坂式・加曾利E式系土器が多く、淹久保タイプ、櫛型文モチーフの文様帶をもつ土器もある。このような本遺跡の組み合わせはこの時期の武藏野台地先端側に比べると、勝坂式・曾利式の色彩が強く、東京都狛塚遺跡例に近い。また、井戸尻式末・曾利式最初頭・関東勝坂式末・加曾利E式最初頭が併存したことを示した例でもある。

第1期10号住居跡例は明らかな曾利式として第17図1があるほか、地文条線の渦巻文のあるキャリバー形(2、3、6、7)がある。時期的には加曾利E II式中段階。純粹曾利式タイプに近い1は第28図23の系譜上にある土器で、胴部の横位平行沈線群上に縦長ボタン文が貼付られたものである。頸部区画線は交互刺突された隆帯であり、第33図33と共に通する。

条線地文のキャリバー形は中部でも関東の影響なしでは成立しないことから判断が遡れるが、第16図3のような胴部括れ部上下が膨らむ器形、つなぎ弧文の口縁部文様帶はより曾利式である。7の口縁部文様帶も幅狭で、渦巻文形態、そのモチーフ、口縁部の櫛形など本来の加曾利E式にないものである。1の場合は地文繩文が加曾利E式的だが、器形、口縁部文様帶の幅などは明らかに曾利式であり、一概に分類できないことを示している。逆に6は口縁部を欠くためどのタイプかはっきりしないが、胴部の器形は直線的、縦長であり、曾利I式の伝統を読み取れる。

加曾利E II式後半では純粹曾利式とできる例は少なく、キャリバー形土器の多くは10号住居跡例でみたように両者の状間に位置する土器が多い。数は少ないが曾利式特有の口縁部の上器に第14図13がある。縁帶状の口縁部無文地の上に連続した円文が並ぶもので、第28図36系の口縁部をもつ。時期もほぼ運動しよう。第3期2号住居跡の胴部が加曾利E式の懸垂文のある連弧文系の土器の口



第29図 水窓遺跡周辺の加曾利E式・曾利式関係対比表(2)

縁部に重弧文で埋められる例、13号住居跡の曾利I式的な条線上に刻印のつく懸垂文の深鉢などがある。

これら諸例から加曾利E式と曾利式との関係は時期によって一様でないことがわかる。本稿では十分な検討ができなかったが、地域での組み合わせの差異の関係を探ることで、時期による両者の変遷、それぞれの時期で地域の置かれた状況を明らかにすることができるようと思われる。

3 中期後半から後期初頭の編年序列

埼玉における加曾利E式土器の編年研究のはじまりは、栗原の吹上貝塚の報告（栗原 1959）がまとめた紹介であり、その後、同氏による大藏遺跡の分析（栗原1962）へつながっていく。編年の詳細を実質的に規定したものは1970年に報告された脇棚遺跡（谷井ほか 1970）といってよい。加曾利E I式の3細分、E II式の2細分、E III式、E IV式までの7段階変遷の提唱であった。筆者の一人谷井はこれを受け、花影遺跡（谷井ほか 1974）、坂東山遺跡（谷井ほか 1973）、舟山遺跡（谷井ほか 1980）などの報告をした。

その後、当事業団の繩文部会の有志によってまとめられた「縄文中期土器群の再編」にまとめられた編年の考え方とも脇棚遺跡における細分の基本的考え方方が踏襲されてきたといえるであろう。そこに至る経緯については宮崎朝雄により「中期上器群編年研究史」としてまとめられており、詳細は参考にしていただきたいが、今から考えても加曾利E式再編にあたって基底はほとんど変わっていなかつたといえよう。

今回の編年枠、呼称の変更に至る経緯は、1994年に細田が報告した櫛ノ下遺跡（細田 1994）、橋本勉の報告した原山坊ノ在家遺跡（橋本 1994）などで検討が進められた中期後半から後期初頭編年にあたり、從来我々が提唱してきた加曾利E IV式の時間としての独立的存在に疑問が生じ、一旦從来の加曾利E III式の枠内で考えてみたらどのような見え方になるであろうかということからまとめたものである。今回は事業団繩文部会諸氏により引き続き中期終末から後期初頭の編年の検討を進める一方、課題として加曾利E式全体の枠組みの見直しも関連して迫られてきた。

主な論点としては、第1に谷井がかつて取り上げた加曾利E I式後半とE II式前半とした土器群がもつ様相の関係から加曾利E I式直後型式の問題がある。頸部無文帯の有無が必ずしも両者を分ける基準となりえないこと指摘したつもりであった。ただし、後述するように連弧文土器の出現についても当時の考え方で大きく左右されていたことは間違いない。

第2点は現在の視点からこの連弧文土器をどのように編年的に位置付けるかの問題であった。すでに島の上遺跡（笠森ほか 1977）1号住居跡では素形となる連弧文土器と対ともいえる曾利式土器が存在し、曾利式と連弧文土器が運動して成立すると考えられることから曾利式土器の分析の必要性を痛感していたところであった。

第3点は先に提出した中期終末から後期初頭の編年の再検討を試みた拙稿（谷井・細田 1995）の矛盾であった。最も表面的な矛盾としては大木9式の細分であった。大木9式古段階に位置付けた原瀬上原遺跡（丹羽 1971）12号住居跡、仲平遺跡（山岸ほか 1989）6号住居跡、桑名邸遺跡（大平ほか 1990）16号住居跡のいずれも炉体土器のみを9式古段階とし、覆土の上器の多くを9

式新段階としたことである。－折遺物の連鎖による幅年を基本とする考え方から離れた結果となってしまった。ただこのことは後に気付いたところで、まず最初にE III式細分に疑惑が生じたのは、筆者にとっては大柄渦巻文の梶山類がE III式前半でも後半でも存在したことであった。当然両者間には変化が読み取れるとの立場で細分したが、当事業団で整理・報告された修理山遺跡6号住居跡や11号住居跡ではまさに両者が共存しており、強引な細分であったことを改めて認識した次第である。

これらの諸点を中心に検討した結果は以下のとおりである。

今回の検討では、加曾利E I式期を2時期に、E II式期を3時期に、E III式期を1時期とし、E III式期に後続する段階を後期初頭とした。加曾利E I式前葉では、井戸尻III式土器を作ることが常態で、曾利I式以前にあたる。E I式後葉では、曾利I式に極めて近い土器が作出すとともに、キャリバー形土器の口縁部文様が主文様の連結から主文様同志への連続へと変化する。水窪遺跡周辺では、この時期には頸部に無文帶をもつ土器がほとんどだが、無文帶の有無が細分の基準とならないことは論を待たない。

加曾利E I式の2分案については、従来設定した加曾利E I式3細分のうちの新段階と、E II式古段階の土器群の比較検討から、連弧文出現以前の土器群を1時期として評価した。この段階をE II式に含めたのは、大木8b式との関係を考慮したためである。大木8b式が加曾利E式や曾利式と器形・文様帶・文様構成において近似した様相を示していることは広く知られた現象である。例えば、大木8b式の某標準資料ともいえる岩手県大館町遺跡（八木ほか 1981）RA102号穴住居跡出土土器をみると、大きく2時期の様相を含んでおり、キャリバー形土器の口縁部文様をみると、文様帶幅が狭く渦巻の強い文様構成であることから、本稿でのE II式前葉から中葉の土器群に近い様相であることが理解される。従って、従来のE I式新段階をE II式とし、大木8b式と対比させたほうが混乱を生じないであろう。

従来、連弧文の出現をもって加曾利E II式に比定してきた。実際に住居跡出土土器群をみると、本稿でのE II式中葉では連弧文を伴うのが常態といえる。中ノ内B遺跡（古川ほか 1987）1号土壙から出土した連弧文と伴出する土器が、大館町遺跡 RA102号住居跡に後続することから、大木8b式の中葉が加曾利E II式の中葉にはほぼ対比可能と考えられよう。従って、連弧文の生成やその後の展開に多大な影響を与えたつなぎ弧文土器は、加曾利E II式の前葉に成立し、中葉での連弧文生成への原動力となった土器と評価できよう。

曾利式系土器についてここで多くを述べる紙数はないが、特徴ともいえる唐草文土器は、大木8b式との関係からみても、ほぼE II式の中葉を大きさかのぼることはないであろう。

加曾利E II式末葉の土器群は、連弧文やつなぎ弧文あるいはキャリバー形土器の縣垂文に磨消繩文が多用され、単位文様への萌芽が認められるとはいえ、土器群の文様構成や個々の文様描出は、依然として加曾利E II式の範疇を大きく外れるものではない。キャリバー形土器にも前段階との区分に苦慮する土器も多く、伴出する連弧文との関係からもなお検討を要する。この時期に現れる34のようなH字状の磨消繩文は、由来を縦帯からの置換と考えるが、図と地からなる上下対向の文様構成は、吉井城山類の生成に絡む文様構成として無視できない。

本稿では、中期終末の土器群として加曾利E III式を設定した。従来の編年研究では、E III式を経てE IV式が位置付けられており、この間はさらに数段階に細分される傾向にある。製作個体に時間差を内包したとも見られる土器群を系統毎に細分することは検証不可能であり、それを保証する資料も存在しないであろう。このような現状に対して、筆者等は、加曾利E III式を新旧に区分し、標式的なE IV式を、個体と伴出関係の吟味から中期と後期に振り分けて考え、時間軸としてのE IV式を否定した。

加曾利E III式土器の一括資料を検討すると、E III式古段階と考えていた資料が圧倒的に多く、E III式新段階に相当する土器は極めて貧弱であった。また両者の土器群を比較すると、土器組成が異なっており、E III式新段階には、キャリバー形の口縁部文様帯系の土器や吉井城山類や梶山類が含まれず、抱球文やJ字文等の土器に両耳壺を伴う土器組成を主体としている場合が多く、柄鏡形(敷石)住居跡から出土する場合が多いことから、いきおい時間差として解消される傾向が強かった。北本市提灯木山遺跡(磯野 1996)で3軒の住居跡が検出され、このうち2、3号住居跡の2軒が重複している(報告書第41図)と報告されている。

1号住居跡は完全な柄鏡形住居跡である(報告書第31、33図)ことも特筆したい。2、3号住居跡をみると、3号住居跡の炉と埋設された2個体の土器、炉の前方に埋設された埋甕が直線状に並んでいることに気付く。また、同一線上には2号住居跡の埋甕が位置している。これらの4個体の土器が全て同一線上に並ぶことに注意すると、このようなあり方が細長い張り出しをもつ初期柄鏡形住居跡の特徴と符合することに気付く。2号住居跡には炉がなく、壁際で出土した2個体の土器は、住居跡に伴うものでない可能性が高い。従って、提灯木山遺跡は2軒の単独の柄鏡形住居跡が存在したと考えられるであろう。1号住居跡出土土器は、口縁部文様帯系と吉井城山類、2号住居跡の埋甕を含めて1軒となる3号住居跡は梶山類と両耳壺である。1号住居跡の口縁部文様帯系の土器は、E III式古段階と考えられてきた土器であるが、共存関係からみて、新旧に区分することは困難で、E III式に口縁部文様帯系の土器が存在することを裏付ける一つの材料となる。2軒が同じ時間幅に含まれることを示す事例といってよい。

本稿でE III式とした土器は、口縁部文様帯系の土器でも沈線主導で文様が描かれたたり、第26図1のように、胴部文様にも吉井城山類との共通性が伺えるなど、基本的にE II式後葉の組成から外れない。一方、第27図18、19、21の抱球文やJ字文の土器は、第27図3・7のように、器形や胴中位での文様の分割、地の部分がH字状となる構成は類似するが、抱球文やJ字文が4単位構成で波状口縁が多いことや胴中位を境に對向するU字文構成に相違があり、巻手状懸垂文もほとんど見られない^{註3}。従って、系統的には異なった出自をもっていることを暗示する。おそらく、梶山類の生成に対応して、文様の沈線化や単位化等の影響を受けて沈線系の土器から成立したのであろう。

抱球文が東部関東から南東北にかけて分布することは、大木9式のいわゆるアルファベット文土器との境界にあたり、アルファベット文生成の過程と絡めて無視する事はできない。一方、東北南部では、大木9式に口縁部文様系譜の土器が多く存在し、アルファベット文と統着した土器も存在することから、両者を時間差と単純化できない。これは加曾利E III式における土器群相互の関係とよくにた現象であろう。従って、これを時間差よりもむしろ系統差の反映と考えたほうが地域を越

えて整合的解釈が可能となろう。

中期と後期との境界に基準となる中津式やその影響下に生成された称名寺式は、出土する土器にかなりの偏りがある。関東地方ではこの時期も加曾利E式系が確たる存在であったことはすでに検討したとおりである。実際、中津式とされる土器も細部を検討すると、本来の形からかなり変形しており、加曾利E式系の影響を無視できない状況であろう。むしろ、加曾利E式系の変化と影響が関東ひいては東北方面を含めた土器群の変容を支えていた一側面があると解釈できる。

今回、加曾利E式を中心に大木式・曾利式を含めて土器の関係を扱った。土器には地域を越えて系統や変化を共有する現象が認められる。このような運動関係の分析を背景にさらに多角的な検討

| | 曾利式系 | 加曾利E式系 | 大木式系 |
|-----------|------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 加曾利E I 前 | 积迦堂 SV10住、22住、74土壙 狐塚3住 一の沢西4住、56土壙 居沢尾根12住、22住 | 堂前4住 水窪I期7住、3期9住 岩の上23住 吹上3住 花積2A住 | 法正尻 SK472 西ノ前 SK8、70 大館町 RA105 野中遺跡 |
| 加曾利E II 後 | 居沢尾根1、5、7、28住 积迦堂 SNSK05、128 曾利4住 棚出41住 | 坂東山(入間市) 1・2次54、 60住 堂前3住 株木1次6住 花陰6住 秩父山7住 | 大館町 RA102C、D層 法正尻 SK332 西ノ前 SK89、148 上野 SK1 |
| 加曾利E 日前 | 留原1住 积迦堂 SNSB10 积迦堂 2住 唐波宮21住 居沢尾根1号穴16住 | 二反田9住 坂東山(入間市) 1・2次38住 (県教委) 9、12住 加能里5住 黒谷田端前1住 | 大館町 RA102B層、301住 西ノ前 SK85、146 大松沢 法正尻 SI77 |
| 加曾利E II 中 | 関山11住 积迦堂 SNSB17 积迦堂 6住 居沢尾根9住 | 坂東山(入間市) 1・2次、38、 49、69、79住 宿東17住 水窪I期10住 二反田8住 島の上1住 | 中の内B土壙 繫 西ノ前 SK32、141 桑名邸15住 上野 SK18 |
| 加曾利E II 後 | 积迦堂 SNSB37、41、44、105 SNSB20、55、56 柳坪2区11住 曾利16住 大畑1住 | 水窪I期6、9住 坂東山(入間市)28住、(県教委) 20住 宿東5住 金耀沢7、53住 花影1住 | 天光6住 原瀬上原4号号穴 沖の原1住 山前2層 中の内B6住 上野 SK24 |
| 加曾利E III | 殿村19住 积迦堂 SNSB05、SNSB78 居平3住 | 久保3次21、22土壙 宿東1住 水窪II期18住、III期3住 坂東山(県教委)19住(崎埋文) 48土壙 古井戸49住 | 原瀬上原12住 仲平6住 桑名邸2、16住 下半石3住 |

が必要となろう。

なお、今までの見解をまとめると前頁の表となる。

4 土器研究の役割

(1) 繩文社会をどのような社会とみるか

繩文時代は今から12000年前、土器の発明、弓矢の使用、貝塚の形成等旧石器時代にはみられなかつた各種の現象が出現したことにはじまる。生活の基盤は前時代である川石器時代の狩猟・魚撈・採集を基盤としたことでは同様といってよいが、土器の出現による食料事情の格段の向上、豊かなバリエーションを生んだことが繩文の社会を支えてきた。このような時代観は大方の見方として一致しているといってよいであろう。

しかし、繩文時代がどのような社会であったか、という問に対し明確な答を出すことは繩文人の生活の痕跡である遺跡から復元するという制限が厳然としてあるため、きわめて困難を伴う。まして、人と人のつながり、ムラとムラのつながりの具体像となると閣の中といっても過言ではない。

多くの考古学研究の先達はいわゆる無文字社会の研究である民族学からの豊かな成果を念頭に置きながら進めてきたといってよいであろう。現在もモデル設定に基づく社会復元の必要性が盛んにとなえられている。安斎正人の諸論考（安斎 1996）をはじめ、谷口康浩の論考（谷井 1986）での親族集団・地域社会の民族学の成果に基づく分析は、谷口論文の表題の「繩文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」からもわかるように現在の大分の研究指針であり、繩文社会の復元にあたっての土器型式に対する意味付けがうかがえよう。

ところで、共同体を規定するものとして、神話・言語・社会組織等が想定される。共同体はいわばこれらの共同幻想を共有する集団といつてもよい。繩文時代の共同体を分析するにはどのような概念・装置で進めばよいであろうか。考古学の側からは型式、地域、領域といった概念が、民族学的成果からは階層構造的に家族、村落、地域社会、部族といった社会組織が想定されてきた。

鈴木克彦も地域性を遺跡差、地域差、地域性、文化圏と構造的に規定した（鈴木 1996）。また、一方では土器から何が引出せるかの命題に対しては、一定の限界を認め、土器がもつ文化諸要素の一端を解明するにすぎない、とした。共同幻想たる神話・言語・社会組織等と一定の距離を置いた視点からながめているといえる。当然対象が過去に生きていた考古学資料ではあるが、民族学とは異なって現在の我々の認識の視点でしかながめられないといった制約があり、自ずと異なる操作・手続きを必要とする。また、求めるべき成果、レベルも同一に論じることはできない。それでは地域性はどのような方法で導き出されてきたのであろうか。

小林達雄は地域性について、核領域、中領域、大領域と階層構造的に区分し、某盤に核領域をあげ、様式、クニ概念に結びつけている（小林 1996）。中領域、大領域は文化圏的概念に近いかもしない。いずれにしても、階層構造を想定している。小林と同様、多くの論者の前提には民族学の成果に基づく社会組織がその前提にあるように思われる。

これらの想定は小林のいう様式、一般的な型式の不偏性、共通性の潜在的な存在が考えられる。暗黙裏の両者の関係は分布圏、さらには文化圏は土器から判断することに結びつく。小林の場合も

土器型式を集団表象とみなす立場から土器が表現する本質的差異から様式が成立し、様式を基礎として地域性の分析へ進んでいる。谷口の場合はこれを一步進め、型式は自然的地勢を超えた広範な地理的範囲に迅速、円滑に伝達、広範な広がりの中で一樣かつ系統的に変化する現象をもつとまとめた。氏は縄文社会に集団の紐帯を認め、親族関係の社会的広がりとした部族的存在を想定しており、その基底には“枠としての型式”概念の存在に依存していることがわかる。

このように考えると、考古学の分析の出発点は鈴木がいうように、土器の諸特徴の共通性と違いに基づく地域性の問題に突き当たる。土器の違いは広く知られるように、選択の偶然性を含めた個人差、遺跡差、地域差に起因するが、違いのあることは谷口の紐帯としての型式と相矛盾するといつてよい。しいて相違の生じる原因を求めるすれば、伝播論的視点である中心と周縁の構えがある。紐帯の基づく共通性があるとすれば相違は生じることはありえないわけであり、地域性との矛盾を解決するには中心と周縁といった構図の打破が必要となる。小林の核領域間の境界はまさに周縁と位置付けられる。周縁とされる地域での現実の土器の集りには様々な系列の土器が存在し、時間的経過による変動も著しい現実がある。確固とした独自性がないとも見える。

たとえば今回検討の対象とした中期後半では、かつて谷井が検討した（谷井 1993）ように、関東においても地域による組成上の違いだけでなく、中部の曾利式との関係も地域によって全く異なった表情をあらわし、共通の紐帯下にあると思えないと考えられた。また、いわゆる大木式、加曾利E式の分布の境界とされる福島県や栃木県の土器組成は地勢を超えた境界線が引ける状況なく、その組成も…見向購要素の混合とされかねない組み合わせである。見方をかえれば、両地域を合せて一つの領域、地域といっててもよい。この地域の説明としてしばしば栃木県については加曾利E式の、福島県については大木式の外周、周縁とみなされてきた。

しかし、見方を代えてこの両地域をみると、様々な要素が交錯した交差点であり、大木10式後半の土器を生む原郷土で、中心そのものといつてもよい地域ともみえたりする。この地域の縄文人にはたして両領域の中間として意識されていたであろうか。両地域のはざまにあって人々の心像は混乱していたであろうか。それぞれの地の縄文人にとっては、現在の視点からみると一見混乱とみえる状況そのものをこの地の本来の姿と無意識のうちに認知していたことは疑え得ない。なぜなら混乱しつづけたとすれば、集団構成員のアイデンティティの崩壊を招くことになる。集団の存続にとっては崩壊の回避、思考形態の維持を図ることは当然であり、したがって村落自体が本来自己完結的、開放系システムを内包することを考えれば、縄文人は中心そのものとして意識していたであろう。

このことはそれぞれのムラが中心と意識していた実態を考慮すれば、広域的にも小地域の立場に立っても結果としては意識された領域の境が存在しないことを示し、縄文社会の構成は並列的な小地域、小地域のつながり、ひいては基本単位としての集落が存在し、集落間のつながり、無限の連鎖の輪により成り立っていたと考えておくのが適切のように思う。縄文社会分析の前提たる共通の紐帯をとりあえず擡げし、かつ、中心と周縁の不在を大前提とし、型式を集団表象や土器の実態でもなく、言葉と物の関係のように現在の土器分析の立場から操作のための概念としてのみ使うことを再度思いだしておく必要がある。

土器分析の基礎は鈴木のいう遺跡差、地域差がその基礎にあり、この差異がなぜ、何によりもた

らされるかを探ることにある。鈴木はその前提として情報伝達のネットワーク（コンピューター用語の制度化されたものを指すのではなく、象徴的な意味で口裂け女、トイレの花子さん、タマゴッチなど流布・伝達のレベルに近い）を想定している。鈴木の型式には人間集団の表象としての側面をもつといった意識が内在しているため、人間集団一型式がもつ情報伝達のネットワークのシステムとして規定しているが、人間集団が本来もっている交通を含めたシステムとして規定し直すことにより理解しやすいものとなるのではないか。人間集団の表象としての型式を擧上げすれば、情報伝達のネットワークは、地勢とその制約が最も影響し、集団相互間の交通が情報の伝達で最も重要な意味をもつことになる。

土器分析のみから導きだされた地域性は、この情報伝達のネットワークのパイプ、密度の違いであり、結果としての地域性と理解されよう。民族学では一つの村落を基点に社会組織、親族構造、神話、その他文化的諸要素について現地の人々の言葉を介して探り、優れた民俗誌が描かれてきたが、たとえ一つの流域であったとしても考古学が対象とするような広がりを徹底的、網羅的に調べることは事实上困難である。民俗誌の多くは点として詳細を極めるといえるが、集落を取り囲む周辺地域を越えた、交換の鎖の輪以外の実態的交渉の有り様は必ずしも得意とするところではないであろう。これに対して考古学を学ぶ者眼前には遺跡という、今までわずかに残ったものしかないという片寄ったデータではあるが、縄文人が残した生活の跡は民族学で扱う例と比較できないほどの量と濃い密度で地域のすみずみにわたり提示されている。土器はその中でも圧倒的な量と多様な情報を内包しており、いかに有効な分析手段とするか、今後も摸索する必要がある。

(2) 土器はどのようにして作られるか

集団に属する縄文人がどのような過程で土器を作り出すかを具体的にイメージとして語ったのは小林連雄の範型論（小林 1967）であろう。多くの研究者が同意できるように、土器製作者が属する集団が共有する土器のイメージの表出とができる。小林はこのイメージを範型とし、具体としての個体に表現する作業と位置付けたことである。このことは現実に作られた土器から製作者のイメージがどのように形成され、組み立てられているかを検討することが可能になったといえよう。しかし、従来の多くの研究は具体としての分類概念として個々の要素が抽出されてきたといえよう。

佐藤達夫の系統論（佐藤 1974）に基づく小型式概念は系統性の重要性を改めて認識させたことで大きな役割を果たし、現在での重要な分析概念として位置するが、具体として表現された要素の抽出のレベルとして提起されたものであろう。

これに対し、小林の範型論は当初イメージを中心とした交換体系を連想させるものがあったが、やがて Type としての多様な型式の分立からなる様式という概念を持出すことで、製作者自身のイメージが固定的、機械論的構造概念となり、枠をはめ、範型を下位レベルでのモデルとしてしまった。佐藤の系統・系譜論に基づく小型式は実態レベルから抽出され、並列的、平面的だったという限界はあるものの、地域の複合した実態の説明としてはより有効な方法といえる。1 個体の土器に他系統の要素が組み込まれている多くの事例の摘出からいわゆるキメラ的、あるいは土器とされる

ものの相対的関係を明らかにしたといってよい。小林の様式論的構図からは範型自身が並存、独立的であり、範型そのもの、範型相互間に網目状にからまつたイメージをもつことを想定しないとすれば、容易にこの現象を説明する方法は生みだし得ないように思われる。時に各種の要素の機械的交換体系で説明しようとすることもあるが、存在そのものの本質に柔構造が想定されるとすれば必ずしも限界に突き当たる。

現在私共が考える土器の製作は、西井幸雄が型式として定義した「それぞれの独自性と開放性をもつ連続する単位」(西井ほか 1996)にみられるように、製作者のイメージそのものが集団としてもつ營為の積み重ねとしての独自性とネットワークに組み込まれた不断的開放性をもち、この積み重ねがさらに營為の基礎となる循環としてシステムであり、製作者個人のくせを含んだ個性と偶然性の所産と考えられる。また、イメージそのものは土器自身がもつ器形、文様帯構成、文様帯、文様要素など様々なレベルでの複合、重層的交錯、イメージそのものがもつアーバン的不断的変形の結果とすることができる。この変形を生む大きな要因は、偶然性の占める割合も大きいが、さらに不断的情報の束の刺激が加わる。その意味でイメージそのものは製作者の意識・無意識そのものであり、縦横な関係性の鎖の輪であって、具体としての土器はその関係性の表出ともいえる。

(3) 編年のための基礎操作

ところで、理念としての型式論は具体的な操作としての編年研究と密接に関係があり、基礎的部分ではきわめて考古学特有の方法が駆使される。本間宏は「土器型式設定の基本原理」(本間 1991)で分析手法として層位論的方法あわせて型式学的方法について要領よくまとめている。層位論的方法にも自然的要因に基づくものとして、堆積土層の層位差、遺構の重複関係、住居跡の床面、覆土の堆積差による時間差、遺物の接合関係による同時性などはその操作に誤りがなければ、相対としての時間はともかく絶対的な時間差は見極めることができる。

これに対してこの自然的要因に型式学的方法の加わった方法に、遺構や一括遺物の多い場合に有効な共通遺物を介した、橋本勉がいう住居跡連鎖による共時性の確認、遺構の少ない場合に行われる土器創成の遺跡間比較…いわゆる足し算、引き算による…一括遺物の検討から導きだされた時間差による方法がある。ある一定の時間幅のまとまりという条件下では住居跡連鎖による方法がより有効であることは間違いない。

しかし、型式学的方法の加わった方法はどの方法であろうと型式に対する姿勢の違いが色濃く反映され、住居跡連鎖による共通遺物、遺跡間の足し算、引き算による違いの抽出による型式概念は、型式学的所産そのものにほかならない。

土器の実態は型式学的検討抜きで把握することが不可能であり、土器研究自体が前提としてこの恣意性を抱え込んでいることは知る必要があろう。これまで多くの分析手法はある同一地域とみなせる地での分析である。このこと自体が一層深刻なのは、系統・系譜の関係を見極める時や広域編年による共時性の確認には遺構内での共存例等からの共時性の確認を求めるもありえるが、実際には型式学的検討の占める割合が多く、個体に表出された共通性より差異に目がいきがちなことである。

1980年代はこの傾向が一層進み、型式学的細分が著しく進められた時代であった。柳沢清一の中期から後期初頭の細分論（柳沢 1980, 1992）は象徴的存在の一つで、東北・関東の中期末細分において、加曾利E IV式5段階、大木10式5段階などを提唱した。ほかの地域、時期でも北海道早期とされる中茶路式4段階、東訓路IV式7段階（大沼ほか 1989）、関東前期のニツ木式2ないし3細分、関山式の5ないし7段階細分（下村 1986）、中部井戸尻III式の3細分（長沢ほか 1986）、殿村遺跡報告での井戸尻式末～曾利式14～16段階細分（白瀬ほか 1987）、加曾利B式、曾谷式等後晚期土器に対する細分（大塚 1983、鈴木1980）等に枚挙にいとまがない。しかし、これらの編年は広域編年を目指した柳沢を含め、大方の根拠は型式学的検討と称する分析が中心となっていた。

これらの論考がいずれも山内清男の究極までの細分論（山内 1932）から影響されていることは明らかであるが、意味ある究極の細分とは、決して自然的絶対的な時間軸の序列を求めるものではない。求めなければならないのは個人差、地域差、偶然性による組み合わせの差などを超えた、あくまで作業仮説としての時間差でなければ縦横に相互の関係を論じる基準たり得ないことはいうまでもない。しばしば取り上げられる住居跡床面と覆土の関係による時間差は、あくまで自然的、絶対的時間差であって、相対的時間差として還元するには様々な手続きが要求される。当たり前のようと思われていることではあるが、えてして陥りやすい罠といつてもよい。

すでに指摘したように型式学的方法による分析の困難性を考えれば、さらなる多層の保証が求められよう。最も根幹となるのは土器そのものがもつ諸特徴の地域内外での論理的整合性であろう。上記の諸細分例はこれにどの程度答えられるのであろうか。

(4) 土器分析の視点

土器研究は從来から基本となる機能的側面、時間軸としての編年研究、土器分布論からの領域、文化論的分析、集団表象としての土器の位置付けなどがあった。今回土器を考える際より多くの情報を引出す観点から、筆者の一人谷井は型式定義と実態とのずれを中心の中後期の土器を検討してきた。ほとんどの指考では結論を出ず、書かれたこと自体に意味があったか自問するばかりであるが、少なくとも從来の型式と実態のずれが全ての地域、段階で存在すること、異なった地域で共通要素が様々なレベルで存在すること、地域内での直線的、単純な進化論的変化をたどらないことなどは明らかにしたと思う。また土器をながめ、成り立ちを考える姿勢として土器から引出せる要素による比較検討という視点を心掛けてきた。当然、從来の型式観からのずれが生じており、問題解決の糸口、切り口はつかめないながら、新たな分析手法の必要性は強調してきたつもりである。

しかし、このことは筆者のみの問題ではなく、現実に進められている編年研究には混乱と称される事態があり、困惑する向きが多い。この混乱そのものは分析者が土器に向かう時の構図の違いによるみえ方のずれを端的に表わしているわけで、逆に多様な見方による成果ともいえる。これらの混乱の状況に広域的視点による土器分析が加わって從来の内在的発展段階に基づく編年に対する補正手段が加わることで論理的整合性を求めるさらなる議論を進める前提が揃いつつある。現在は固定的構図から多層多角的構図へシフトする時期がきているように思われる。

ところで、土器研究にあたって心している主な諸点をあげると以下のようになる。

- 繩文社会観、土器製作の基本理念
- 認識可能なものとしての相対的時間軸による編年
- 個人差、地域差、組み合わせの偶然性、統計処理の誤差を超えた差異の抽出
- 広域比較による運動と諸要素の整合性

土器に表現された差異が時間差、操作概念としての型式として意味をもたせるためには、活性に基づく検討を中心に型式学的分析に加え、地域を越えた縦横な論理的整合性を求めることがあろう。

(5) 土器研究の目的

地域はたびたび述べたように、一つの集落を取り囲む地域は共同幻想を共有するといえるが、隣接した村落はまた、全く別の自己完結的集団と指定しておきたい。これらをつなぐのは共同体間の連鎖の輪であり、情報ネットワークといえよう。したがって地域とは累積した文化的営為と情報の多層的重なり、すなわち、文化要素の多層的、相互に交差した複合体とみることができる。構成員も共同幻想の枠内に存在し、土器作りにあたってもこの枠に規定される。

谷口の引用した部族の定義、すなわち『部族至上の政治・経済機構も宗教も存在しない。……部族組織につらなる各地域社会は機能的に均質……独立した分節にはっきり区分できる……同盟の網状組織であって、……地域社会間の紛争の調停をする役割を負う』といった側面からも土器が地域の表象として強く結びついてしまうことはかえって土器から引出す情報にタガをはめてしまうことになるであろう。また、阿部友寿は Hodder の論文から引出し、『物質文化の広がりは交易、婚姻による移動、集中した部族の統制などとは直接結びつかず、物質文化の特性の保持はむしろ世論、社会への同化、女性の地位などが要因』とし、安易に物質文化と社会との関係を結びつけることに疑問を提示している(阿部 1996)。

当然ではあるが、1万年を超える繩文時代の社会組織がすべての段階で一様たり得ない。草創期から晩期に至るまでのいくつかの画期により人類史上の発展段階に位置付けられることは当然であり、それぞれの段階で様々な結合があったことが想像される。さらに狭いといつても日本列島は南北2000kmに及ぶ長大な地域であり、政治・経済がもつ大きな力の支配下にある現在の日本列島内の偏差から考えても繩文時代にあってはその偏差の多さは想像を超えると思われる。

このような背景をもつ地域差そのものは、それぞれの段階で共同幻想を共有する集団の志向、活力の差ともいえる。土器の研究は地域そのものを関係の鎖の中で浮かび上がらせることにあるといえよう。しかし、現在考古学研究者が獲得して居る解明のための方法論として確たるものではなく、模索を続けることしかない状況に置かれている。解明の糸口は従来進められた繩文時代研究の見直しと新たなる方法論の模索しかない。

筆者はとりあえず膨大に密度高く集積された遺跡単位の資料を相互の共通性と相違をみきわめながら、比較していくことからはじめたい。すでに、一つの流域を細かな遺跡間比較を試みた例(小暮 1991)もあるが、土器創成と社会の関係を前提とし、領域の連鎖として理解しようとしたため、全体の中で位置付ける視点を失っている。この視点で進めるためには、全体、部分の関係を常に意識しながら進めなければ、偶然性を超えた差異の抽出は不可能といってよい。全体と部分の視点は

繰り返しの比較・検討によって整合性に近付くことが可能であろう。このような土器分析の作業はまだはじまっている状況といってよい。地域に生まれ、地域で生きた縄文人の多様性と生き生きとしたダイナミズム、交通の鎖の輪の復元はこの過程を通してはじめて可能となるであろう。

註

- 註1 曹利式と大木8b式との関係を追求した水沢教子氏の研究（水沢1996）がある。
- 註2 中ノ内B遺跡1号土壙出土土器の位置は、E II中葉から後葉までの間で考えててもよいように思われる。大木8b式との関係はまだ厳密に検討できる状況ではないであろう。
- 註3 特に東関東に多いようである。一例をあげれば、匂瀬台遺跡38号住居跡・長田娘子ヶ原遺跡089号土壙・024号住居跡・240号住居跡・砂川遺跡33号住居跡などがある。
- 註4 例えば、大槻川遺跡第V層・第IIIc～d層出土土器を参照されたい。

参考文献

- 相原淳一ほか 1988 「大槻川・小槻川遺跡」 宮城県教育委員会
- 赤石光賀ほか 1978 「秩父山遺跡」 上尾市文化財調査報告第5集
- 秋本真澄 1977 「沖ノ原遺跡」 津南町教育委員会
- 阿部友尋 1996 「土器と社会の関係」 神奈川考古第32号
- 安斎正人 1996 「考古学における構造変動論」 古代第102号
- 石塚和則 1995 「尼尻遺跡」 狩山市教育委員会
- 黒上義明ほか 1989 「天光遺跡」 福島県文化財調査報告書第219集
- 磯野治司 1996 「提灯木山遺跡第2次調査」 北本市遺跡調査会
- 岩井住男ほか 1970 「踏棚」 鳳翔7
- 大木英行 1990 「匂瀬台遺跡」 成田市教育委員会
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加須利B式研究（1）」 東京大学文学部紀要 第2号
- 人沼忠春ほか 1989 「美沢川流域の遺跡群Ⅲ」 北埼調報62
- 大平好一ほか 1990 「桑名郡遺跡（第2次）」 国営總合農地開発事業矢吹地区調査発掘調査報告6 福島県文化財調査報告書第226集
- 小野正人ほか 1987 「駅進堂II」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
- 岡本健一 1993 「谷津・二反田・下向山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 鹿島英明ほか 1992 「坂東山遺跡 第1・2次」 入間市遺跡調査会
- 加藤裕 1956 「神前岡大松沢貝塚の研究」 その1.2 宮城学院女子大学研究論文集
- 神奈川県考古同人会 1978 「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年表試案」 神奈川考古第4号
- 神奈川考古同人会 1980 「シンボジウム 縄文中期後半の諸問題 土器集成図集」 神奈川考古第10集
- 神奈川考古同人会 1980 「シンボジウム 縄文中期後半の諸問題」 神奈川考古第11集
- 金沢佳生ほか 1982 「郡山市野中遺跡調査報告」 福島考古第23集
- 宮多圭介 1989 「長田娘子ヶ原遺跡・長田杏花田遺跡」 印旛都市文化財センター
- 栗原文藏ほか 1973 「岩の上・娘子山」 埼玉県教育委員会
- 栗原文藏 1959 「大和町のむかし 吹上貝塚」 郷土資料第3集
- 栗原文藏 1962 「大高遺跡」 新修世田谷区史付編 世田谷区役所
- 黒坂雅人 1994 「西ノ前遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 小暮伸之 1991 「野川流域における縄文時代中期後半の集団移動」 東京考古第9号
- 小林公明 1988 「蔚波宮」 富士見町教育委員会

- 小林達雄 1967 「縄文早期に関する諸問題」 多摩ニュータウンII
- 小林達雄 1996 「縄文人の世界」 朝日選書557
- 埼玉県教育委員会 1973 「埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧(昭和26年～昭和40年)」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第2号
- 齊藤祐司ほか 1988 「霞川遺跡」 入間市埋蔵文化財調査報告第8集
- 齊藤祐司ほか 1992 「坂東山遺跡 第3次調査」 入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第13集
- 斎藤祐司ほか 1992 「水窪遺跡」 入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告 第12集
- 齊藤祐司ほか 1993 「金剛沢II遺跡 第1・2次調査」 入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第14集
- 齊藤祐司ほか 1996 「久保遺跡 第3次調査」 入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第18集
- 植森健一ほか 1977 「前島・島之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
- 植森健一ほか 1989 「埼玉県北本市 上手遺跡発掘調査報告書」 北本市上手遺跡調査会
- 佐藤透夫 1974 「十石型式の実験—五領ヶ台式と勝坂式の間—」 日本考古学の現状と課題
- 島田哲男ほか 1981 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その1—昭和51・52年度 居沢尾根」 長野県教育委員会
- 下村克彦 1970 「花積貝塚」 埼玉県遺跡調査報告書第15集
- 下村克彦 1986 「施文原体の変遷:羽笠繩系土器」 特集編文1「器の編作」 季刊考古学第17号
- 鈴木克彦 1996 「亀ヶ岡式土器分布論序説—国内における土器分布と地域性—」 研究紀要第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木德雄 1990A 「称名寺式土器」 調査研究集録7 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1990B 「称名寺・堀之内I式土器の諸問題」 編文後記の諸問題資料集 編文セミナーの会
- 鈴木秀雄 1996 「坂東山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集
- 鈴木正博 1980 「曾谷式研究序説」 古代探叢
- 曾根原裕明ほか 1992 「西川小遺跡第1・2次」 舛能の遺跡(13) 舛能市教育委員会
- 谷井彪 1968 「水窪遺跡の報告」 第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会
- 谷井彪 1973 「坂東山遺跡」 埼玉県教育委員会
- 谷井彪 1978 「加曾利E II式の覚者」 埼玉県立博物館紀要5
- 谷井彪ほか 1982 「縄文中期土器群の内編」 研究紀要1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井彪ほか 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集
- 谷井彪 1993 「埼玉県における縄文中期後半の地域性の一様相」 研究紀要第15号 埼玉県立歴史資料館
- 谷井彪・細田勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利ヒ式土器」 日本考古学第2号
- 谷口康浩 1986 「縄文時代の親族組織と集團表象としての土階型式」 考古学雑誌第72巻第2号
- C・T・キーリー編 1976 「前原遺跡」 国際基督教大学考古学研究センター
- 富元久美子ほか 1991 「芋久保遺跡(第1・2次) 発掘調査報告書」 舛能の遺跡(11) 舛能市教育委員会
- 富元久美子ほか 1992 「加能里遺跡13次調査」 舛能市教育委員会
- 小島弘ほか 1975 「高野原敷遺跡発掘調査報告書」 入間市高野原敷遺跡発掘調査会
- 中平 黒 1982 「宿東・後耕地」 日高市教育委員会
- 中平 黒 1988 「宮ノ後・宿東4・5次」 日高市教育委員会
- 中平 黒 1994 「宿東7次」 日高市教育委員会
- 中平 黒 1995 「宿東9・10次」 日高市教育委員会
- 中山誠二 1988 「関山遺跡I」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集
- 中山雅弘ほか 1989 「下平石遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第22集
- 長沢宏昌ほか 1986 「一の沢遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第19集

- 長沢宏昌ほか 1987 「羽越電鉄」 山形県埋蔵文化財センター調査報告第22集
- 並木隆ほか 1986 「柳川流域遺跡群(IV) 宮前遺跡調査 和田遺跡第7次調査 山下後遺跡第3次調査」 所沢市文化財調査報告書第18集
- 並木隆ほか 1987 「若潮遺跡第5次」 柳川流域遺跡群(V) 所沢市教育委員会
- 丹羽茂 1971 「東北地方南部における中期縄文時代中葉・後葉上器群研究の現段階」 福島考古第12号
- 野村哲・今井正光 1990 「前ノ根・原城原遺跡」 入間市埋蔵文化財調査報告第10集
- 野村哲 1994 「久保遺跡 第1次・第2次調査」 入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第16集
- 野村哲 1995 「水泽遺跡 第2次」 入間市遺跡調査会報告 第17集
- 西井幸雄ほか 1996 「栗原原洞台」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第171集
- 水沢敦子 1996 「大木式B型の変容(上)」 長野県の考古学 長野県埋蔵文化財センター
- 橋本勉 1991 「向山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第106集
- 橋本勉 1994 「原川坊ノ在寒遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第144集
- 阪部敬史ほか 1971 「東京都狛塚遺跡の調査」 長野県考古学学会誌第11号
- 本間公 1991 「十器式設定上の基本原則」 福島考古第32号
- 藤森栄一・武藤雄六 1964 「信濃境曾利遺跡調査報告」 長野県考古学学会誌第2号
- 藤森栄一ほか 1965 「特集シンボリズム—中期縄文文化の諸問題」 長野県考古学学会誌第3号
- 藤森栄一編 1965 「非戸尻」
- 古川一明ほか 1987 「中の内八遺跡」 宮城県文化財調査報告書第121集
- 細田勝 1994 「樋ノ下遺跡」 第1分冊 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 宮井栄一ほか 1989 「古北戸一編文時代」 児玉工業用地関係埋蔵文化財発掘調査報告V 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 岩崎朝輝ほか 1976 「黒谷田端前遺跡」
- 松木茂ほか 1991 「法政院遺跡」 東北横断自動車道遺跡調査報告11 福島県文化財調査報告書第243集
- 宮城県教育委員会 1976 「山前遺跡」
- 宮坂光明ほか 1990 「櫛畑」 苫野市教育委員会
- 白瀬忠幸ほか 1987 「殿村遺跡」 山形村遺跡発掘調査報告書第6集
- 森田安彦ほか 1987 「留原」 東京都五日市町留原32分離留原遺跡発掘調査報告書
- 八木光則ほか 1981 「大館遺跡群」 鶴岡市教育委員会
- 柳澤清一 1996 「東日本における縄文・後期の大別境界と広域編年軸の検討」『古代』 第102号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1990 「大木式土器論」 古代探叢
- 柳沢清一 1992 「加曾利E(新)式編年研究の現在」 古代94
- 柳戸信吾 1993 「林木遺跡・須原遺跡」 故能の遺跡(15)
- 柳戸信吾 1986 「堂前遺跡」 故能の遺跡(3) 越能市教育委員会
- 山岸英夫ほか 1989 「仲平遺跡」 二春ダム開通遺跡発掘調査報告1 福島県文化財調査報告書第216集
- 山本暁久 1993 「横浜市洋光台猿田遺跡発見の柄鏡形往届址とその出土遺物」 縄文時代4 縄文時代文化研究会
- 山内清男 1932 「縄文上器文化の真相」 ドルメン1-4
- 結城慎一 1989 「「野遺跡—城力鉄塔関係発掘調査報告書」」 仙台市文化財調査報告書第127集
- 吉田 稔 1996 「修理山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古田義明 1959 「斐宿と思われる縄文中期の上器群」 石器時代3
- 渡辺俊夫 1982 「砂川遺跡」 灰城県教育財團

研究紀要 第13号

1997

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社